

江戸時代以前の越谷を通る奥州古道（令和5年8月改訂）

令和5年(2023)8月 加藤 幸一

私たちになじみの深い日光街道（正式名は「日光道中」であるが、本論では「日光街道」と記す）は、江戸幕府によって江戸時代初期にできたほぼ直線の道路である。その頃に草加宿や越ヶ谷宿、粕壁宿が誕生した。しかし、日光街道ができる以前から奥州（東北地方）との往来に使われた道は、今でも越谷市内の各所に残っている。これを「奥州古道」と呼ぶことにする。そこで奥州古道は「河川の氾濫によって河川沿いの両側にできた高まりのある微高地（自然堤防）の上を人々が往来したであろう」との前提をもとにして考えを進め、江戸中頃の文化文政年間に越ヶ谷宿の本陣を勤めた福井猷貞著「越ヶ谷瓜の蔓」を考察するにあたって高崎力氏や秦野秀明氏の研究成果を引用して奥州古道の道筋を推定した。今から約200年前に著された書物「越ヶ谷瓜の蔓」は、江戸幕府ができて約200年もたってからの文献ではあるが、江戸時代以前の奥州古道をつかむ上で貴重な手掛かりとなった。

「江戸時代以前の越谷を通る奥州古道(令和5年8月改訂)」にいきつくための経緯を以下にまとめる。

[越谷市内の奥州古道に関する研究の推移]

- ・平成23年(2011)4月 「江戸時代以前の越谷を通る奥州古道(一考察)」

平成23年以降、加筆・訂正を繰り返す中で、「奥州古道」を一時「古奥州道」と変えることもあった。

- ・平成30年(2018)5月 越谷市立図書館主催・郷土歴史講座「大相模地区西部の歴史」

大成町・相模町内の奥州古道の推定ルートは、旅人(巡礼者)の人柱伝説のある観音寺^{いり}を含む堤土手^{つつみ}を奥州古道としていたが、この堤土手が江戸時代以前から存在していたかは不確かなので、南百村の角から大相模郷の見田方村^{ごう み た が た}、東方村^{ひがしかた}、西方村^{にししかた}の各村々を結んで経由する方の現在の吉川^{よしかわ}県道の一部を通る往還ルートの方を奥州古道とした。次頁の絵図2「八条領三拾五ヶ村小澤正直家絵図」(天保7年8月)では、川側のそばの「堤土手」の方ではなく、「街道筋往来道」と記載されている往還の方を奥州古道としたのである。この「街道筋往来道」を江戸時代以前から続く往還としての奥州古道としてとらえた。

- ・令和元年(2019)5月 越谷市立図書館主催・郷土歴史講座「大相模地区東部の歴史」

東^{あずまちょう}町内の奥州古道ルートの堤土手の誤りに気づき、市立図書館の講座にて訂正ルートの下妻道を示す。

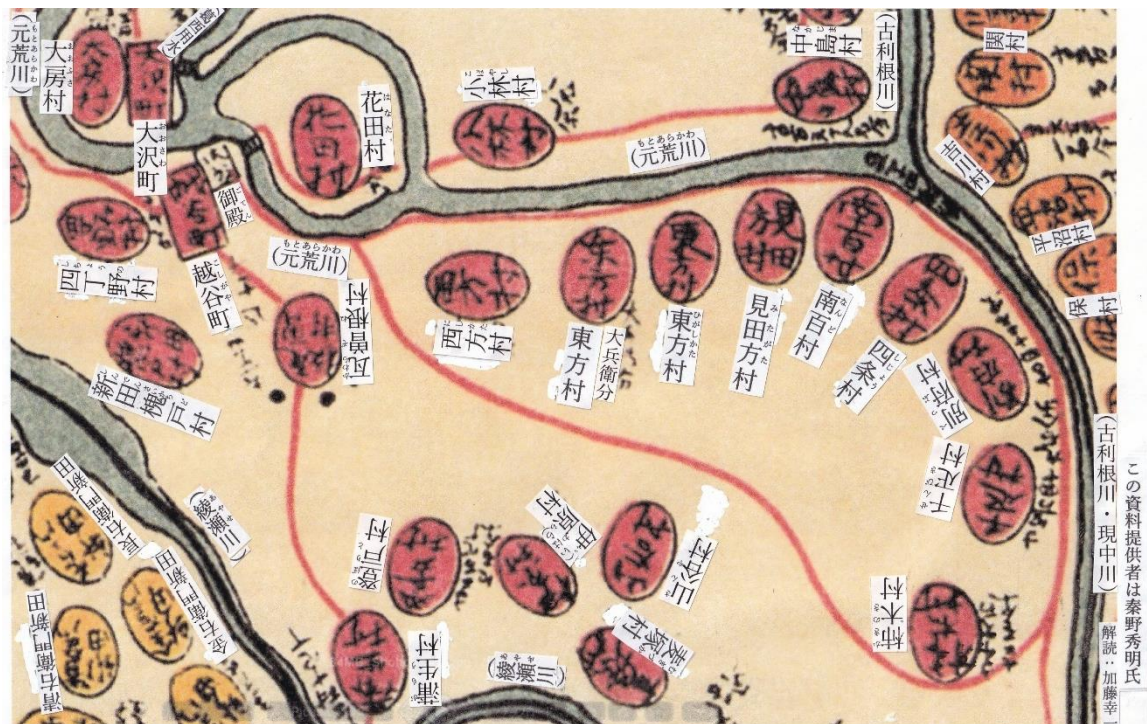
- ・令和5年(2023)5月 越谷市立図書館主催・郷土歴史講座「知られざる越谷を通る奥州古道」

今までの研究成果を取り入れて「江戸時代以前の越谷を通る奥州古道(令和5年改訂版)」と題して発表する。

- ・令和5年(2023)8月 秦野秀明氏から「正保国絵図」^{しょうほう}を元に大相模郷の堤土手が奥州古道であるとの指摘

大成町^{たいせいちょう}・相模町内の堤土手のみが描かれている次頁絵図1の江戸初期の「正保国絵図」により、奥州古道のルートを人柱伝説のある観音寺^{いり}を含む堤土手の古道に戻す。堤土手は村々を水害から守る堤防の働きだけではなく、旅人の道としても江戸初期に既に使われていたのは事実であり、一方、次頁の江戸後期絵図2に記載された村と村とを結ぶ「街道筋往来道」周辺の地は自然堤防が未発達と思われるため、常に周囲よりも高い堤土手の古道の方が旅人にとって使い勝手がよい。「街道筋往来道」が江戸時代以前からあったかは不詳である。そのために平成23年4月の「江戸時代以前の越谷を通る奥州古道(一考察)」で奥州古道として提示した堤土手を一度は疑ったが、再び奥州古道として戻した。

絵図1.「正保国絵図」(江戸初期)



『正保国絵図』出典：東京市役所編(1994)『東京市史稿 市街篇 第6』附録 復刻版 臨川書店

絵図2. 八条領三拾五ヶ村小澤正直家絵図(絵図中の黒線は「堤土手」、赤線は「街道筋往来道」)

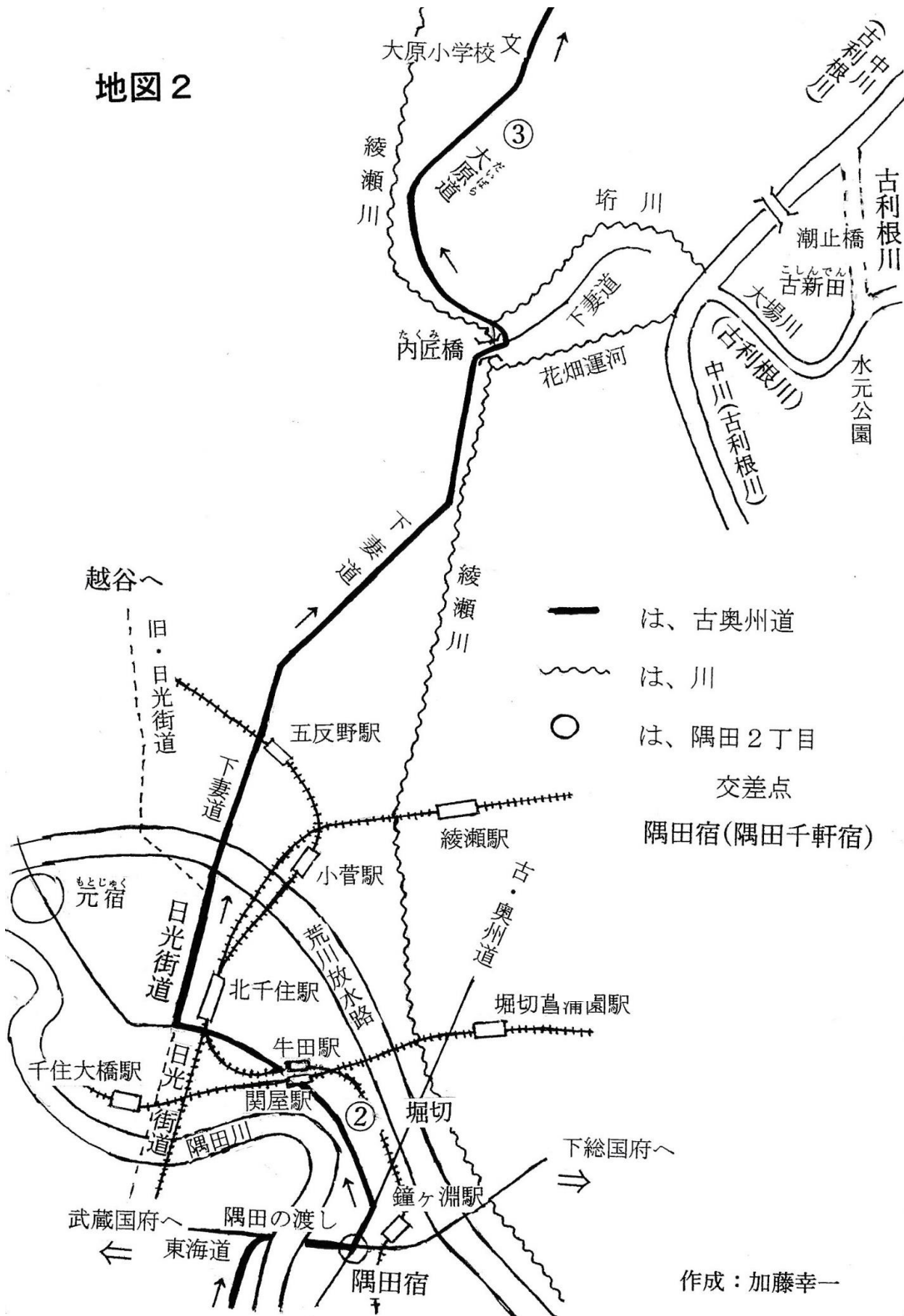


34 頁※註 21 西方村(不動尊)から登戸村・蒲生村までの古道 〈上記絵図2は、所有者小澤正直氏より掲載許可済み〉

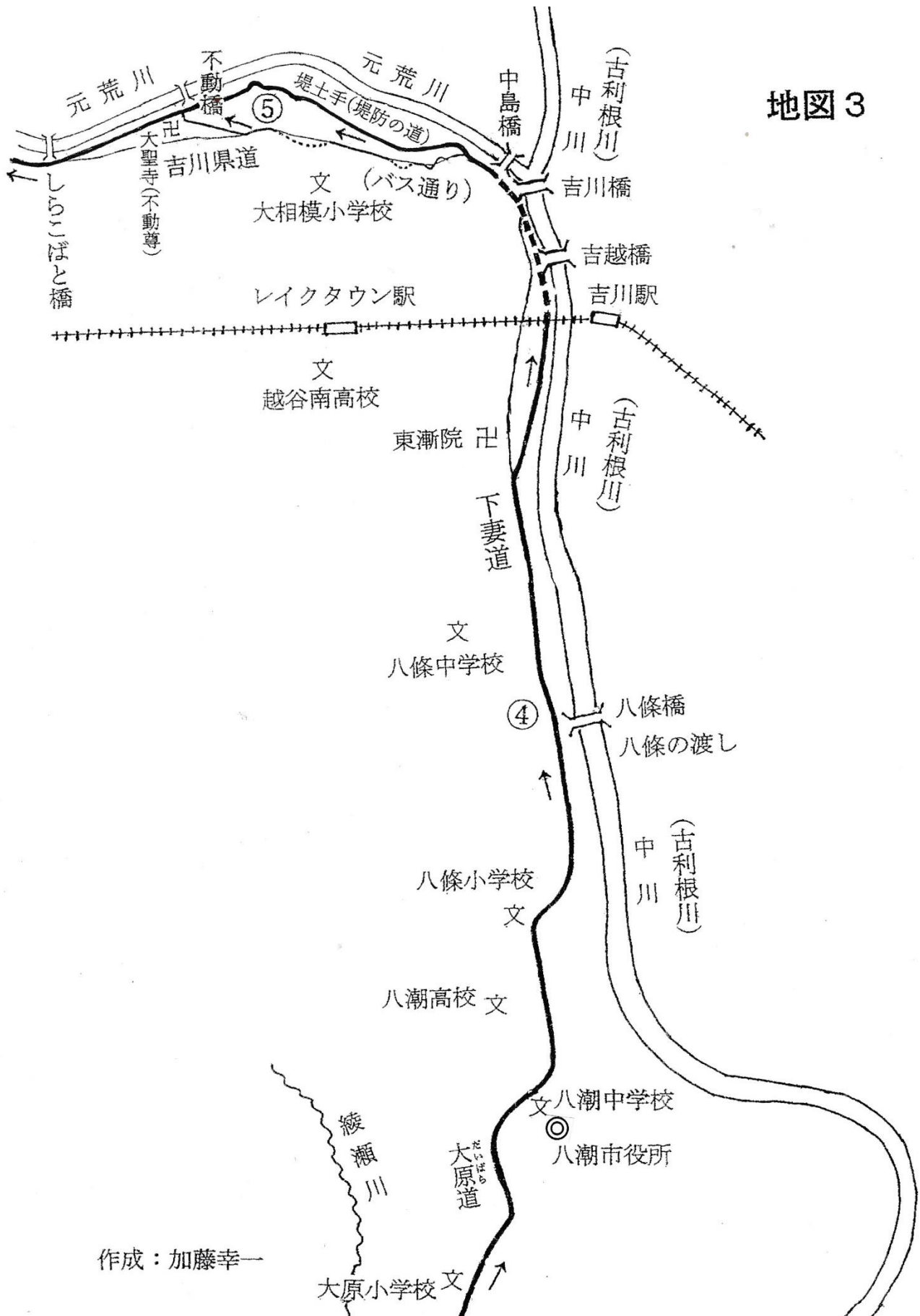
なお、春日部の梅田橋から万願寺橋までの奥州道の具体的なルートについては、今もって不明である。

3

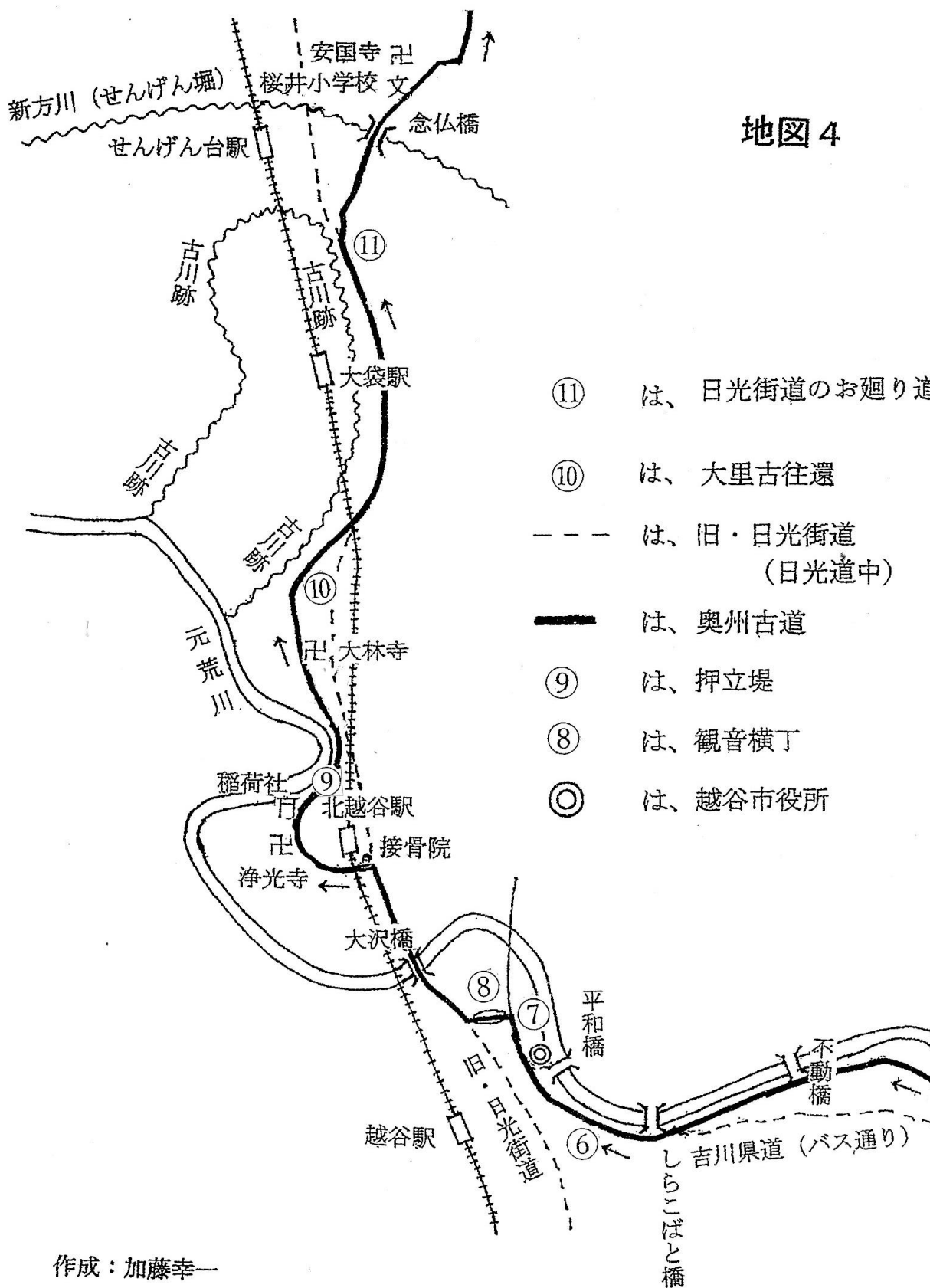
地図 2



地図 3

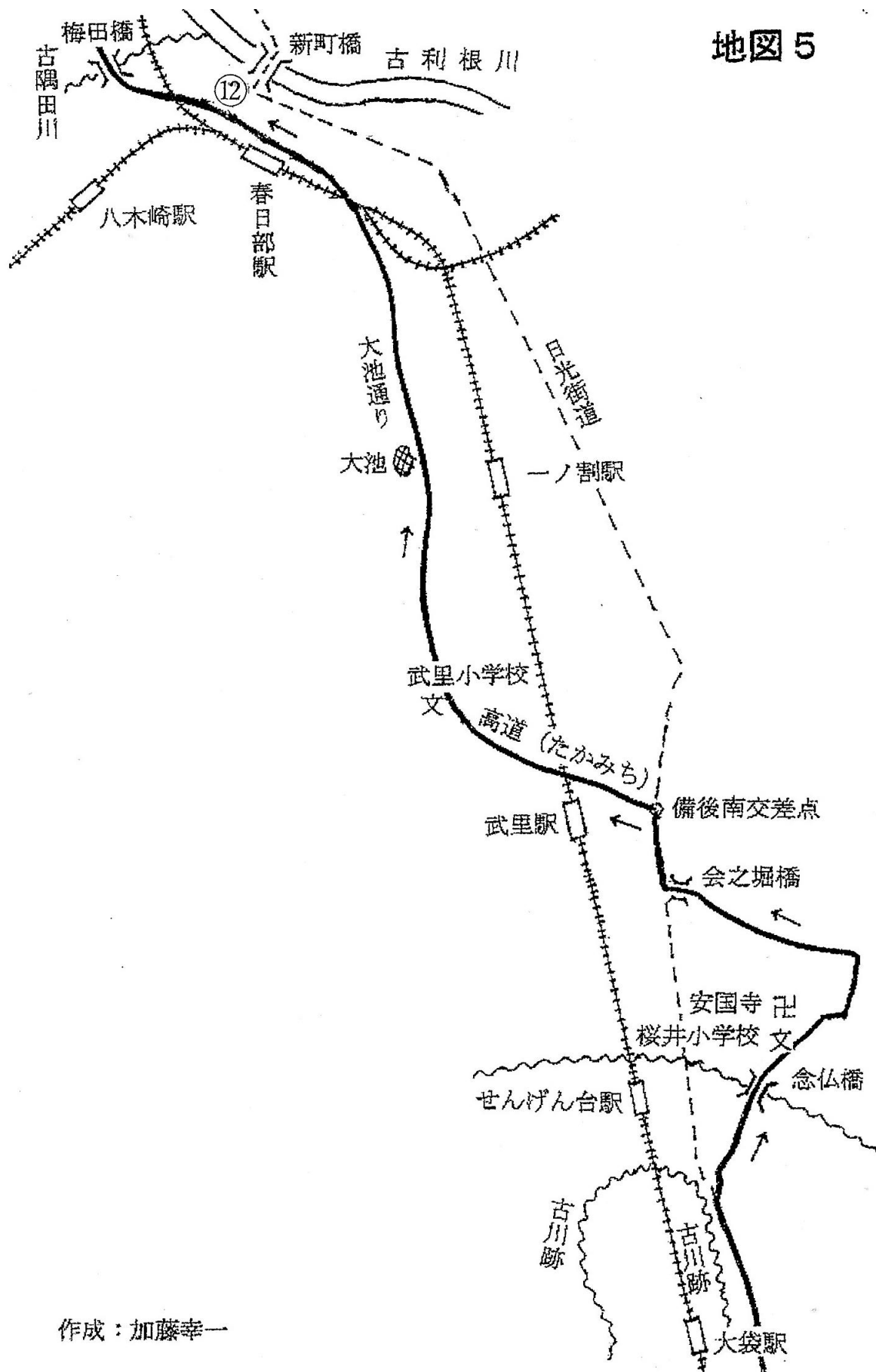


作成：加藤幸一



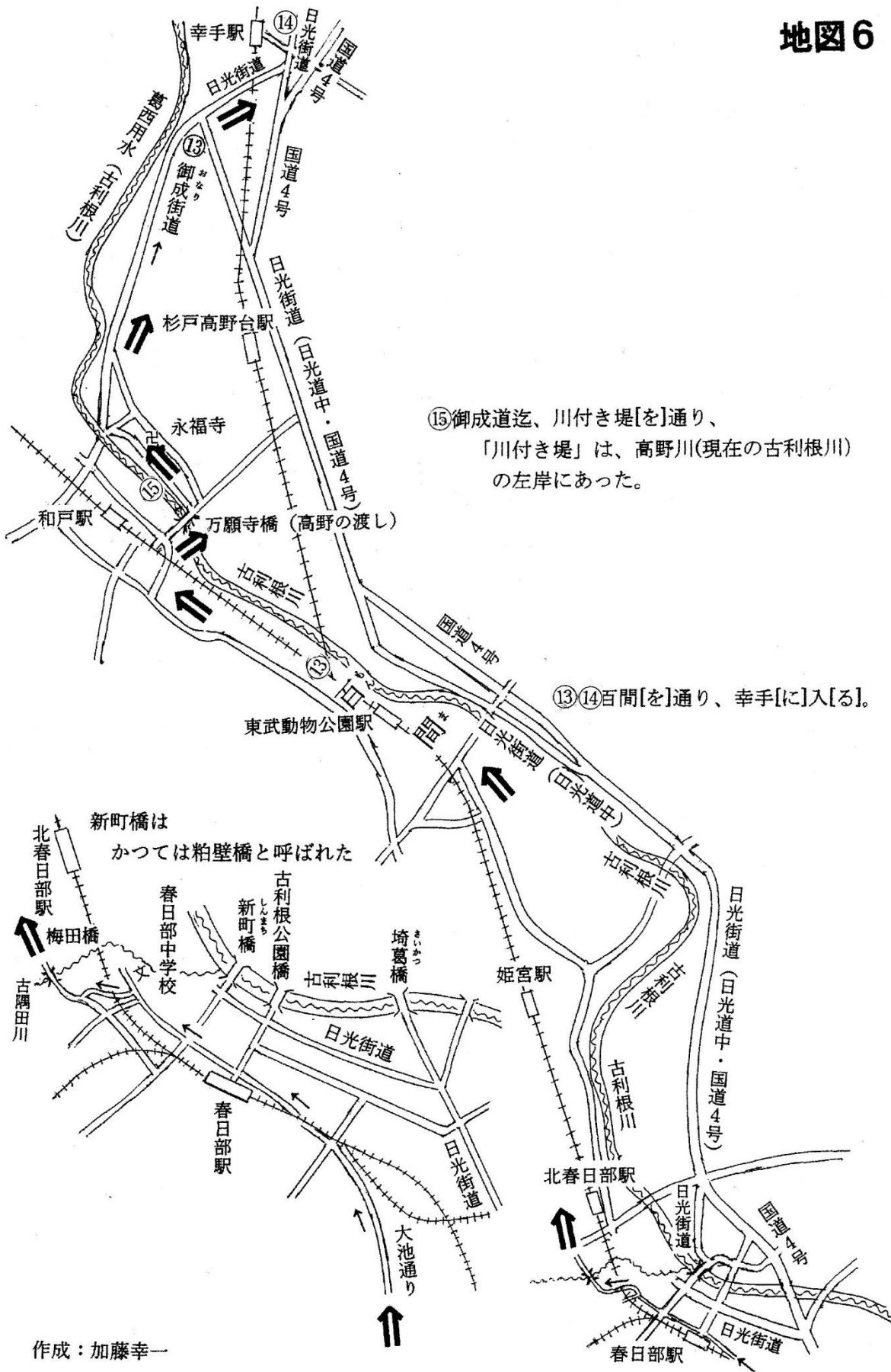
作成：加藤幸一

地図 5

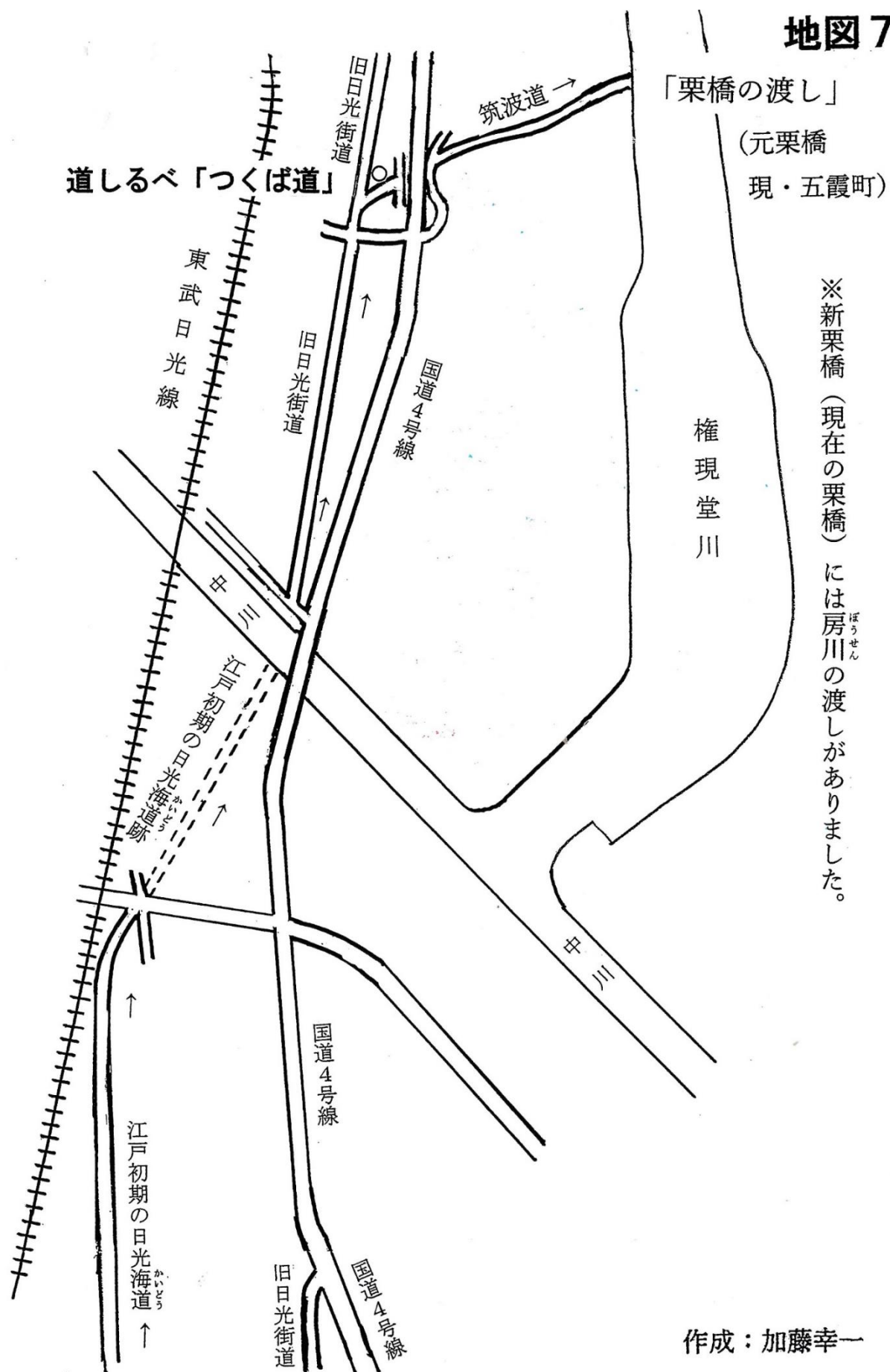


作成：加藤幸一

地図6



地図7



1. 「越ヶ谷瓜の蔓」に書かれた「往古奥州道」（奥州古道）

江戸時代初期の奥州道については、江戸時代の文化文政年間に書かれた「越ヶ谷瓜の蔓」(福井猷貞著)の中で「往古奥州道」として「越谷市史四 史料二」の45頁に、次のように述べられている〈註1〉。原文をわかりやすくするため①から⑬までの番号を付け、一部手直してわかりやすくした〈註2〉。

秦野秀明氏によると、福井氏は独自に「中古」と「往古」の使い分けをしているという。往古奥州道では「往古」として江戸時代以前の古い頃を想定しているようだ。

〔資料1〕

往古奥州道(は)、①千代田御城下より、②千住秋屋(関屋)の里、③大原(を)通、④八条堤(を)通、⑤南百角より西方、⑧中町横町(観音横丁)より元荒川(を)渡り、⑨押立堤(を)通り、⑩大里古往還、⑪間久里、⑫粕壁橋(新町橋)手前より⑬百間(を)通り、⑭幸手(幸手宿)(に)入(る)。⑮御成道迄、(高野川の)川付(き)堤(を)通り、往還にて之れ有る由。

さらに「越谷市史四 史料二」76頁の上段にも「元道中」、つまり奥州へ向かう元の往還(古往還)として同様に次のように述べている〈註3〉ので抜粋する。

〔資料2〕

(略)慶安以前元道中ハ、②千住より③大原(を)通、④八条堤より⑤南百・西方堤(を)通、⑥瓦曾根溜井堤より⑦六本木・⑧中町横の筋、往還(を)成しを、(略) ※ルビや句点、()書き等は、加藤上記の資料2は、資料1で触れられなかった⑥瓦曾根溜井堤と⑦六本木についても触れている。

資料2は秦野氏からの情報である。

以上の資料は、江戸時代以前の奥州古道のルートを知る上で大きな手がかりとなった。

【奥州古道のルート】

上記の①から⑮について説明すると、次の通りである。

- ① 江戸城(太田道灌の中世の江戸城があった所)の大手門から常磐橋を渡り、奥州(東北地方)へと向かう。 地図1 参照
- ② 「千住秋屋の里」とは「関屋の里」の誤りであろう。千住関屋の里は千住関屋町あたりから隅田の渡しまでを指す。関屋の里も当時は千住に含まれていた。ここに奥州古道が通っていたのである。 地図1 と 2 参照
- ③ 八潮市にある大原道を通る。 地図2 と 3 参照
- ④ 八条堤とは中川(古くは古利根川と呼ばれていた)右岸沿いの堤の土手道を指し、下妻道とも呼ばれた。ただし、下妻道は「柿の木四区」バス停から北は土手道の堤防から河川敷に下り、北に向かっている。今も一部が残っている。 地図3 参照
- ⑤ 南百から西にある西方の方面に向かう元荒川側に今も残る堤土手の古道である。このことは、資料2の「南百・西方堤(を)通」からもわかるし、2頁の絵図1でも元荒川沿いの道が描かれているのでわかる。 地図3 参照
- ⑥ 瓦曾祢(瓦曾根)堤とは瓦曾根溜井沿いの堤土手の古道である。 地図4 参照

- ⑦ 六本木とは、市役所の北にある六本木と呼ばれた堤土手の追分の地点である。 地図 4 参照
- ⑧ 中町横町とは、現在の観音横丁を指している。市役所の北にある六本木と呼ばれた地点の追分から西に観音横丁を下り、日光街道の中町まで進む。そこから北に進んで大橋（大沢橋）にて元荒川を渡ったのであろう。
- 資料 2 の「横の筋」とは、北に進む主要道路に対して横(東西)の道路のことで、これも中町横町と同じ意味で、現在の観音横丁を指している。 地図 4 参照
- ⑨ 押立堤とは、北越谷第五公園そばに今もある堤土手の古道である。 地図 4 参照
- ⑩ 大里古往還とは、江戸時代の日光街道ができる前からあった街道を意味し、大 林や大里あたりでは日光街道より西側の元荒川の古川沿いの自然堤防（河畔砂丘）上を日光街道と並行して進んだと考えられる。 地図 4 参照
- ⑪ 間久里とは、現在の^{しもまくり}下間久里と^{かみまくり}上間久里を合わせた地域である。 地図 4 参照
- ⑫ 粕壁橋とは春日部市の古利根川に架かる日光街道が通る現在の^{しんまち}新町橋をさす。 地図 5 参照
- ⑬ ^{もんま}百間とは古利根川の右岸にある^{みやしろ}宮代町の百間である。
- ⑭ 幸手は日光御成街道と日光街道が合流する宿場町である。 地図 6 参照
- ⑮ 「御成街道まで川付き堤を通り」とは、秦野氏による「御成街道に合流するまで、高野の渡しを渡って^{たかの}高野川（古利根川）右岸にある川付き堤を通り」との説は妥当と考えた。幸手宿までは、御成道という往還が今も現存する。 地図 6 参照
- 以上の①から⑮をまとめると、次の通りである。

①江戸城を出て、隅田川を渡り、当時千住の地域に含まれていた②関屋の里を抜けて、八潮市内に入って③大原、さらに中川（古くは古利根川）沿いの④八条堤を進み、越谷市内に入ってさらに中川沿いを進み、現在の吉川橋そばの⑤^{なんど}南百の^{かど}角より大相模の現在も遺る^{つつみ}堤土手の道を西方村方面に向かい、次に⑥瓦曽根溜井の堤土手道を通して⑦六本木の追分まで進む。そこから中町の⑧観音横丁を通り、日光街道に入り、その先の元荒川に架かる大橋（大沢橋）を渡る。そして大房の^{おおふさ}稲荷神社から⑨^{おったて}押立堤を通り、日光街道ができる以前の⑩大里古往還を通して、⑪間久里方面に進む。それから先は触れられていないが、現在の春日部駅北側を通り、古利根川に架かる粕壁の⑫粕壁橋（現在の^{しんまち}新町橋）を渡らずに古隅田川の方を渡り、古利根川に沿って宮代町の⑬^{もんま}百間方面に進み、古利根川を^{たかの}高野の渡しで渡って⑭高野川（古利根川）左岸沿いの川付き堤を上流に進み、往還の日光御成道に合流して⑮幸手宿に入る。

2. 江戸から越谷市内に入る前までの奥州古道の考察（上記①～③）

- ① 徳川家康は、^{てんしょう}天正 18 年（1590）8 月 1 日の「^{はっさく}八朔」の吉日に関東に入り、江戸^{みなと}湊（東京湾）から奥に入り込む遠浅の^{ひびや}日比谷入江（新橋から大手町にかけて）そばの江戸^{やかた}館（平安末の江戸氏の江戸館、後の太田道灌の江戸城）に移り住んだという。奥州（東北地方）へは、ここからまず^{ひら}平川（日本橋川）

を渡り（常磐橋あたり）、後の日光街道を進み、忍岡^{しのぶがおか}や浅草寺^{せんそうじ}の東側を過ぎ、「隅田の渡し」^{あさくさぐち}（浅草口橋、大橋）を渡り、対岸の木母寺^{もくぼじ}あたりに至る。東進して古代の隅田宿（墨田2丁目交差点）に進み、ここから奥州に向けて北進（3頁の地図1）する。なお「隅田の渡し」の下流には鎌倉時代以前からの「橋場の渡し」^{はしば}がある。これも隅田の渡しより古くからあった奥州への渡し場である。江戸初期になると入間川^{いるま}（現在の隅田川）に架かる千住大橋ができると、街道の渡し場の役割は減るが、その後も地元にとって貴重な渡し場として残る。

古代に隅田宿（隅田千軒宿）があった現在の墨田区内の墨田2丁目交差点（4頁の地図2）には、二つの古道が十字路として交わっている。東西の古道は、武蔵国府（現在の府中市）と下総国府（現在の市川市^{こうのだい}国府台）を結ぶ東海道であり、北東に向かう古道は、堀切、亀有、金町、松戸を通して奥州（東北地方）に通じる奥州道（奥大道^{おくおおみち}、陸奥道^{むつみち}）であったという。

- ② この北東に向かう奥州道（奥大道^{おくおおみち}、陸奥道^{むつみち}）は、堀切のずっと手前で北西に分かれて関屋の里（現在の足立区千住関屋町）に通じる道があり、これも奥州道の一つと考えられる。さらにその関屋から北西に進み、元宿^{もとじゆく}（現在の足立区千住元町^{もとまち}）、中世の湊江城^{ふちえ}（足立区本木の中曽根神社付近）跡の西側を通り、それから現在の伊興遺跡^{いこう}方面に向かって北上するルートがある（鎌倉街道支線）〈註4〉。

一方、関屋から越谷・春日部方面に行く奥州道もある。ここで取り上げるルートである。北千住駅西側にある日光街道を北に進み、大正年間にできた荒川放水路の手前で左折する日光街道とは別れ、直進して下妻街道を進むルートである。いくつかの奥州道のうち、このルートについて話を進めていく。

- ③ 「大原を通り」^{だいばら}（地図2・3）とは、八潮市内にある大原道^{だいばら}を指す。大原を抜けることから、下妻街道を通して内匠橋^{たくみ}（榎戸橋^{えのきど}）〈註5〉を渡る。つまり、千住から下妻街道沿いに進み、現在の綾瀬川に架かる内匠橋^{たくみ}を渡る。その先は左折して大原に向けて北上する大原道（〈註6〉）を通る。なお、内匠橋から小菅^{こすが}方面に流れる現・綾瀬川は江戸初期の寛永年間に作られた人工の川である。

一方、内匠橋より、そのまま、まっすぐ東方に進むのが下妻道である。実はこの下妻道も奥州道の一つである。それによると、古新田^{こしんでん}の古利根川沿いに進み、八条の渡し〈註7〉に向かうことになる。古新田村の古利根川沿いに今でも堤土手の道が残っている。

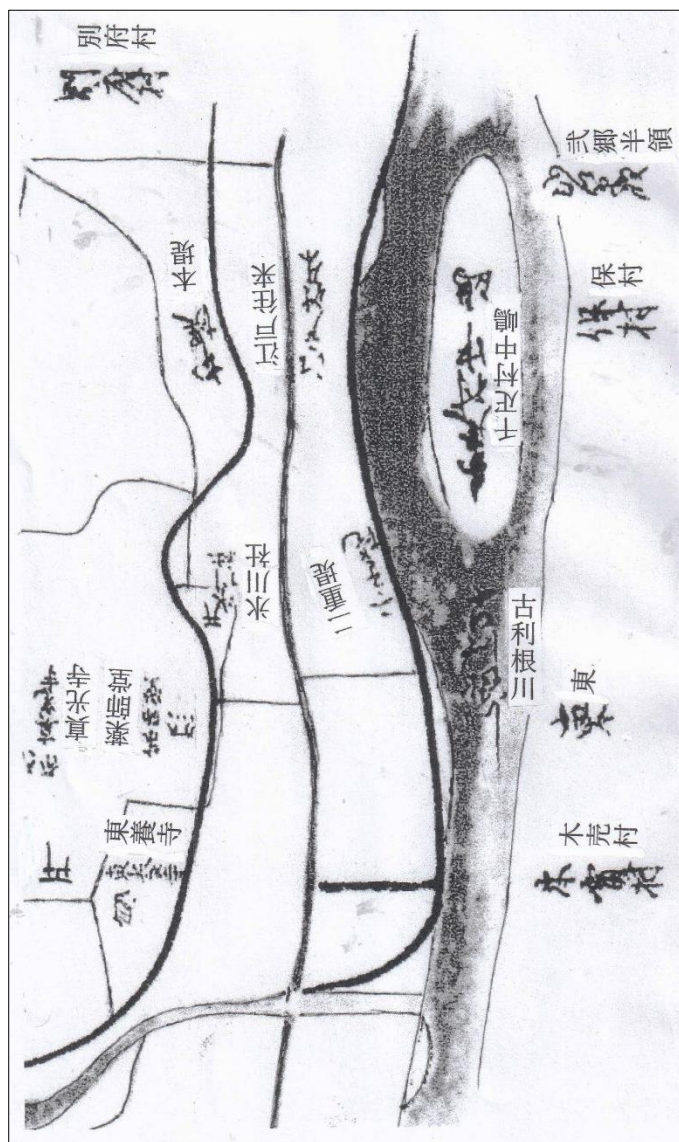
大原道は比較的高まりのある土地（かつての大河と推定される毛長川の自然堤防か）にあり、「八条の渡し」に行くには、大原道の方が大水で難渋することがあまりない最短距離であり、越ヶ谷宿の人々にとってもより親しみがあるためか、「越ヶ谷瓜の蔓」では大原を通る奥州道が紹介されている。

3. 越谷市内における奥州古道の考察（④～⑨）

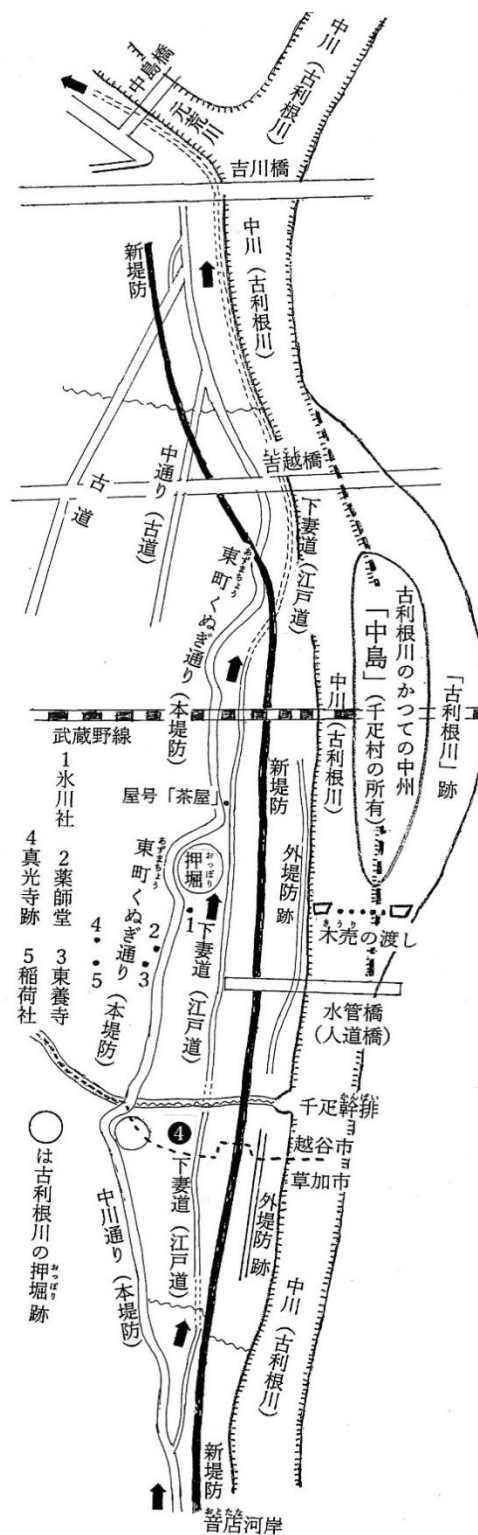
- ④ 奥州道は大原道の突きあたりの八条の渡しで川を渡らずに中川（古くは古利根川）の右岸に沿って北上する。これが「八条堤」の道である。「八条堤」とは中川の右岸沿いの古道で、八条領にある中川沿いの八条、柿ノ木、東町^{あずまちよう}にある下妻道に当たり、奥州古道と推定できる（地図3）。草加市内の「中川通り」は江戸時代の本堤防にあたり下妻道でもある。その河川敷側に外堤防があった。下妻道は「柿の木四区」バス停から川側に下って河川敷に入り、中川沿いに北に向かって進んでいる（次頁地図1）。

絵図3「千疋村絵図」

西袋村家文書「千疋村絵図」（八潮市史、史料編、近世Ⅱ）より一部抜粋して加筆掲載、解説は加藤幸一



地図1



下妻道は、越谷側では本堤防のくぬぎ通りと河川敷にある外堤防との間にあったことがわかる。新堤防は新しく建設した現在の堤防である。

越谷市内における^{おおさがみ}大相模地区の旧・^{せんびき}千疋村、^{しじょう}四条村、^{べつぷ}別府村、^{なんど}南百村には、草加市内から続く^{しもつま}「下妻道」と呼ばれる古道が河川敷側にあり、奥州古道と推定できる。現在、その下妻道は武蔵野線あたりまで名残をとどめている。かつてはさらに北の吉川橋あたりまで続いていたが、中川の拡張と開発によってその名残は全くない。河川敷側にある下妻道は周辺が低いので水害に配慮して多少高くした道だったのであろう。川側には二重堤防としての外堤防もあった。このことは上の絵図3「千疋村絵図」

⑤ 「南百^{なんどかど}角より西方^{にしきた}」とは、南百〈註8〉の角、つまり吉川橋の右岸から南百の鎮守・水神社（現在、東町2-76に移転）にかけての地域をさす。南百の角より大相模の西方村へ進む奥州古道は、中川（古利根川）沿いの八条堤より引続き元荒川沿いの右岸にある堤土手の道を西に進んだのである（2頁の絵図1・2及び下の地図**2・3**）。なお水神社（今は他所に移転）の裏側（北側沿い）には古道があったとの伝えがあるが、これは西から続く堤土手（堤防の道）であったのかもしれない。

東大寺跡

東福寺跡

市大六天堂

古道

古道跡

堤土手道

堤土手道 (奥州古道)

奥州古道

100m

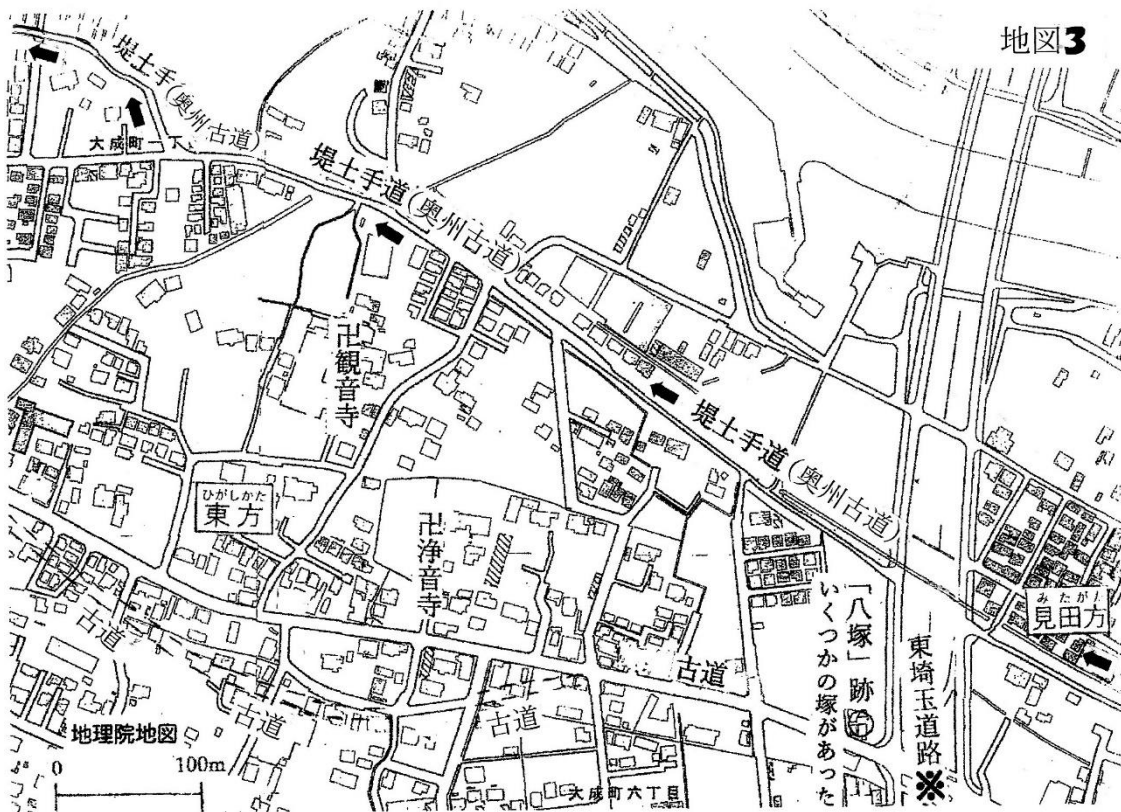
地理院地図

地理院地図

中島橋

東玉道路

2



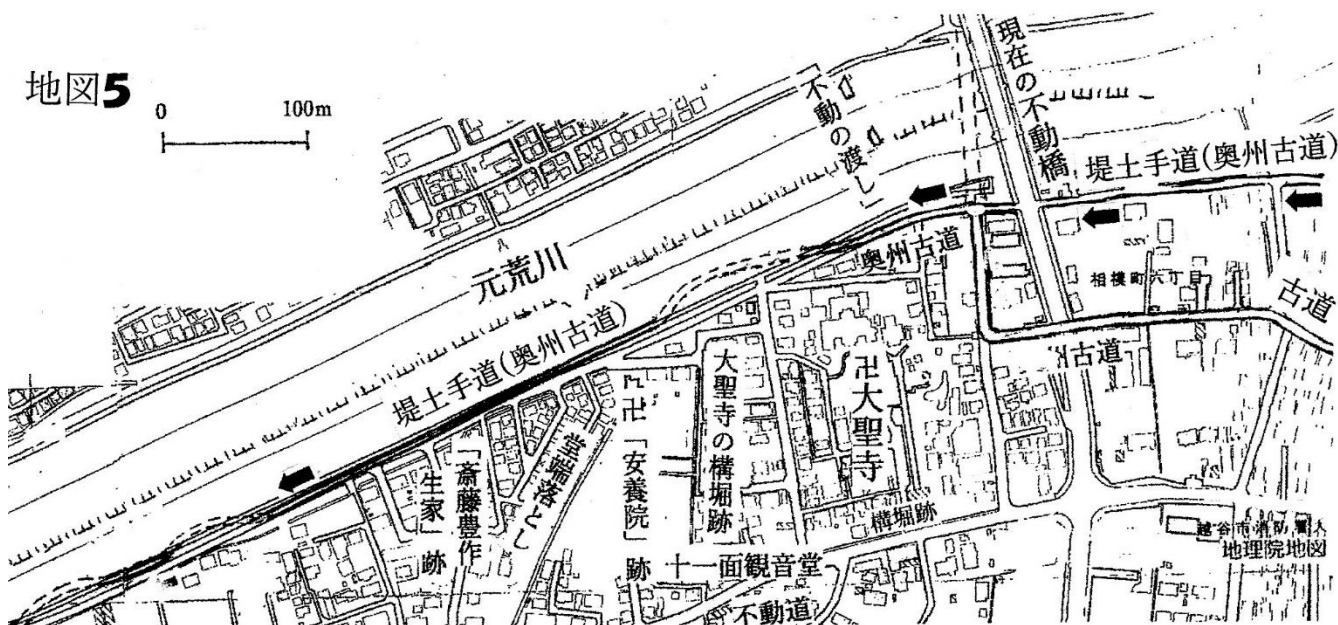
14

なお、大相模保育所バス停からは、そのまま真っすぐ西に向かう大正時代に新設された吉川県道（大相模不動尊通り）と大聖寺に向かう西北西の往還の二手に分かれる。西方村の大聖寺に向かう西北西の道^{にしきた}を通して大聖寺東門に行く道は、地元では古くから伝わる古道といわれている。現在の吉川県道は、八条用水から大相模保育所バス停までは新設された新道であり、一方、大相模バス停より東は、既にある古道を利用して整備された道である（下の地図4・5と次頁の地図6）。

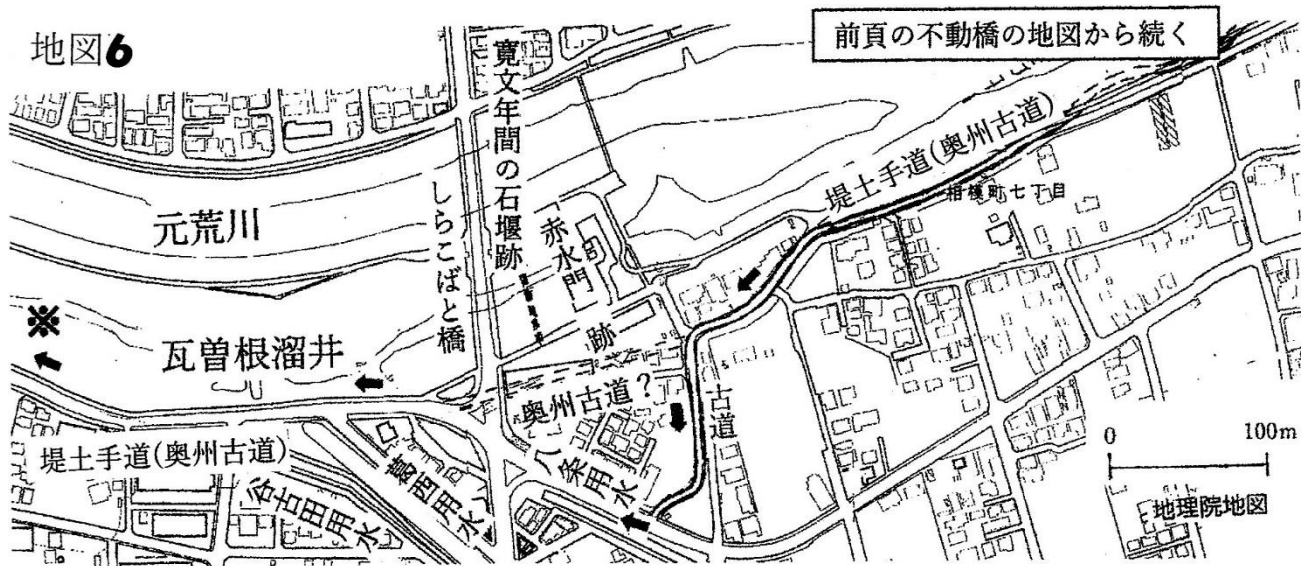
奥州古道は、東方村や西方村の鎮守である久伊豆社、日枝社の北側の堤土手の道を通る（地図4）。



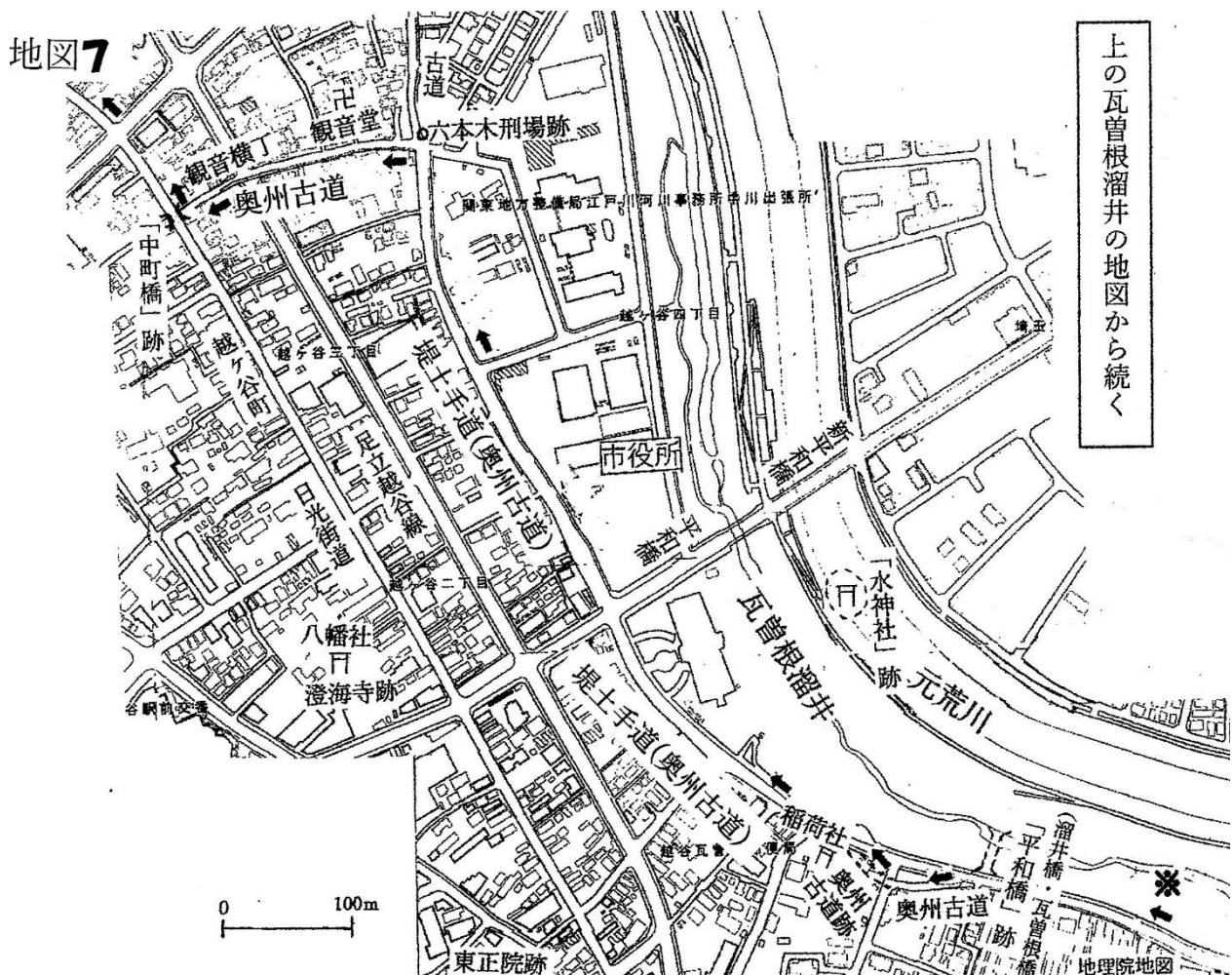
大聖寺からは、元荒川沿いの堤土手道を通り、瓦曾根溜井沿いの堤土手道をめざす（地図5）。



⑥「瓦曾根溜井堤」^{つつみ}とは、大相模から続く瓦曾根溜井に沿った道は、今も残る奥州古道である。次の地図**6**と**7**には、大相模から続く瓦曾根溜井に沿った古道、かつての奥州古道が見られる。



⑦「六本木」とは、越谷市中央市民会館や市役所の西側の道（かつての堤土手道）を通過して市役所北三百m先で観音横丁へ向かう分かれ道の追分である。川側が六本木刑場跡〈註10〉である（地図**7**）。



⑧ 中町横町とは現在の観音横丁〈註 11〉のことである（地図7）。

追分から土手道の下に降りて観音横丁を通り、日光街道の中町橋（江戸時代にあった橋）まで進む。そして現在の日光街道を北に進んで元荒川に架かる大橋（大沢橋）を渡ったのである。

大橋（大沢橋）には、江戸時代以前から境板橋（下総国と武蔵国の国境に架かる板の橋という意）と呼ばれた橋が

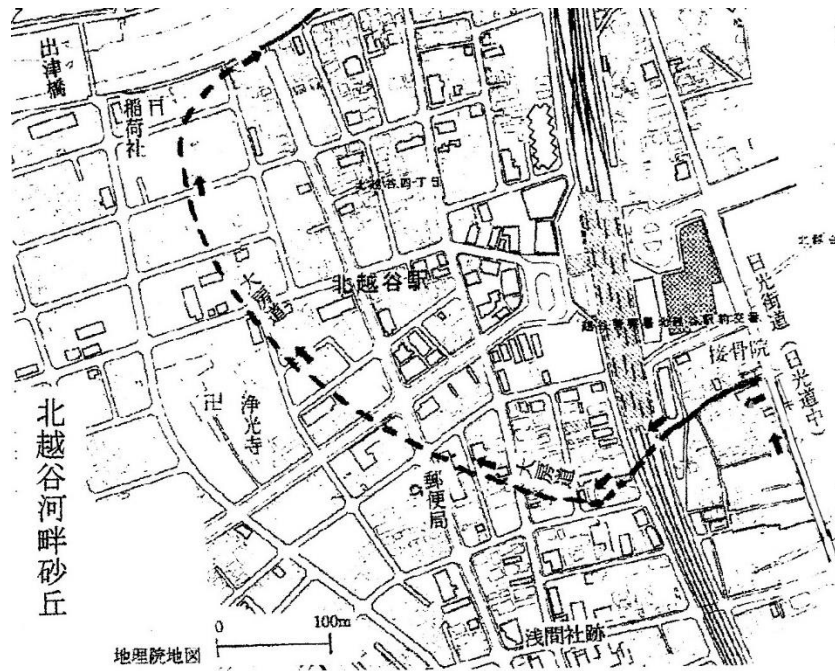
既に架かっていた。

さらに越ヶ谷側には市神神社（〈註 12〉現在は南方に移転）や大橋際河岸もあるので、それゆえに江戸時代以前から賑わっていて奥州古道がここを通っていたと思われる。「中町横町より元荒川を渡り」と記述されていることから、奥州古道は観音横丁から続く現在の日光街道の中町（ここに江戸時代は中町橋があった）より日光街道を北に直進し、大橋（大沢橋）を渡り大沢町に入った。



元荒川を渡ったあと、さらに現在の日光街道を北へと直進する。その先は、迅速図に描かれた浄光寺の東側を通って大房村の鎮守稲荷神社の東側に通じる古道（現在は開発で消滅）があるが、これが大房道と呼ばれる奥州古道と推定した秦野 秀明（2011）（註 16）を引用した。大房道に通じる道は、日光街道の途中で西に直進して東武鉄道を越え、元荒川沿いの押立堤に進む。

大房道のルートについて詳しく述べると次の頁の地図9の通りである。大沢の上宿（大沢三丁目）にある日光街道から分かれる小道、つまり天神前橋（現在の「そば水角屋」の南側）を過ぎて百メートル先あたりから西に向かい、北越谷河畔砂丘〈註 13〉の東側沿いの自然堤防上の道を通る。現在の北越谷駅前郵便局そば十字路や北越谷公民館付近を通過している。その古道沿いの大房の浄光寺本堂裏の墓地造成地からは昭和五十年に中世の古銭が出土した。それについて秦野氏は「その古道に沿って山伏も点在して住んでいたことは確実といえ、現在もその子孫の方が当時と同じ場所に住んでおられます。つまり、江戸時代は日光道中から分かれる交通の要所であったのであろう。」と付け加えている。大房道は日光街道ができる以前の奥州古道と推定できるのである。



地図9
北越谷にあった大房道

⑨ 「^{おつたて}押立堤」とは、北越谷第五公園〈註14〉付近に今もある土手道ではないかと考える（地図10）。

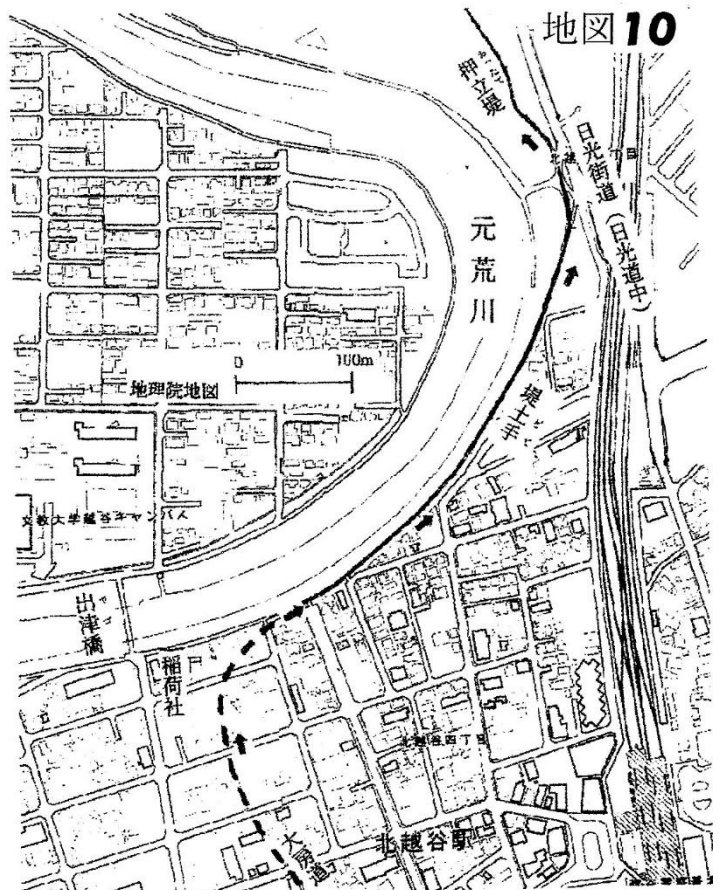
「押立堤」は、「^{おおえ（おえ）}押江りの薬師」（大房の薬師堂）〈註15〉と関連していると思われる。

「押江りの薬師」は、「大江りの薬師」「鵜の森の薬師」とも呼ばれたが、現在はこの地に^{ほうしょういん}宝性院と呼ばれる寺院が建つ。かつての

「押江りの薬師」の近くの北越谷第五公園そばには、今も残る堤土手道があるが、次の^{おおさと}大里古往還に続いていくに違いないと考え、この土手道を「押立堤の名残」ではとの仮説を平成23年に立てたのである。

この公園は、かつての元荒川の入り江であり、江戸湾の満ち潮がこの辺まで遡上してきたといわれ、薬師堂周辺の森には^う鵜が多く住んでいたという。以下は、秦野 秀明（2011）（註16）からの引用である。

《^{ゆうてい}福井猷貞著「大沢猫の爪」の中では「^{かみ}上外^{はず}レ大房村境をさして押立と云」と記載を取り上げて、「上」とは^{かみ}大沢町上宿（上組）、現在の大沢3丁目をさし、その「外レ」の大沢町と大房村との境界を^{おつたて}押立と呼ばれていた。》と解釈し、《北越谷5丁目には、かつて村組として「押立組」があり、北越谷5丁目の西端にほぼ南北に存在する北越谷第五公園そばにある土手道を「押立堤」と呼ばれたことは間違いない。》としている。〈註16〉。

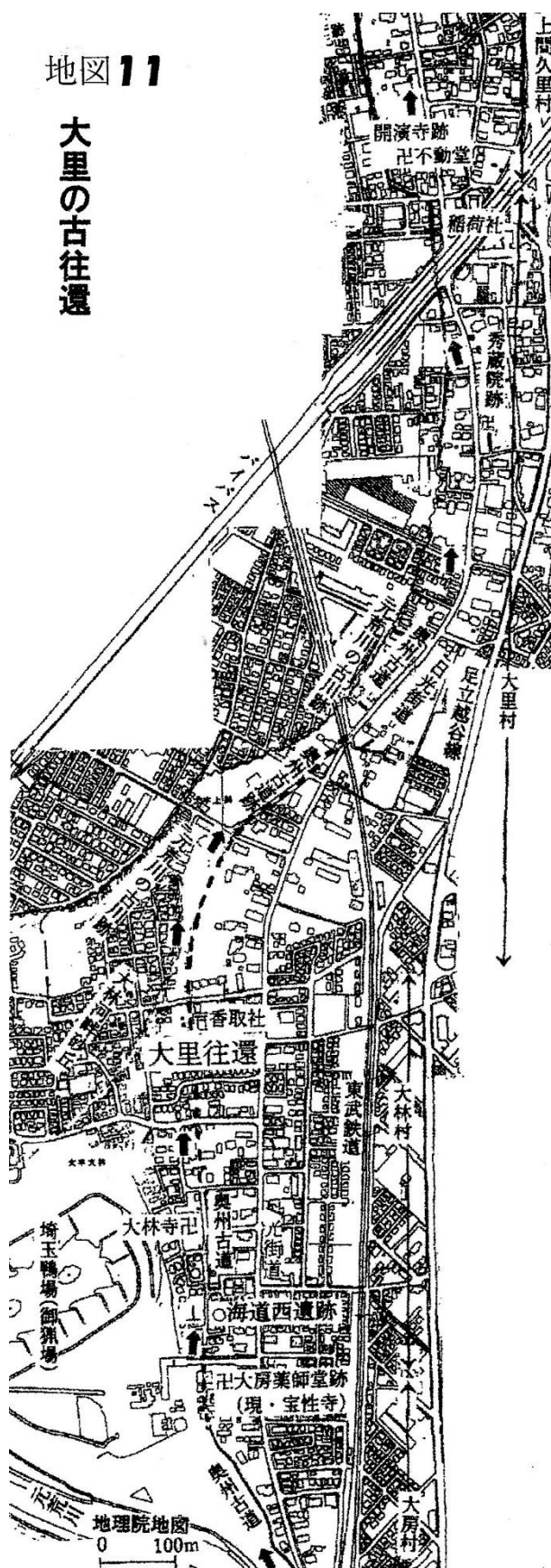


地図10

なお「押立」の読み方は、「おしたて」が「おったて」となまったものであろう。

地図 11

大里の古往還



- ⑩ 大里の「古往還」〈註 17〉とは、江戸時代の日光街道より古くからあった街道を意味し、
おおばやし おおざと
大 林や大里あたりでは奥州古道が現在の日光街道の西側の自然堤防上に並行して元荒川の古川沿いに見られていたと思われる（左図・地図 11）。

そのルートは、^{だいりんじ}大林寺の東側の道を通り、日光街道と東武鉄道とが交差する大里の踏切あたりで、日光街道に合流したのではないだろうか。

奥州古道と海道西遺跡 かいどう

令和 4 年 12 月 28 日発行の越谷市の「海道西遺跡発掘調査報告書 1」によれば、大林の「海道西遺跡」からは平安時代より近世にかけての遺構や遺物が見つかった。つまり、平安時代から人々が住んで生活していたことが判明した。その地点は私が推定した奥州古道のそばである。江戸時代以前に往還としての奥州道があったとの裏付けになる。そればかりか、その往還は室町時代、さらには鎌倉時代と遡れる可能性がある。市内要所の奥州古道の発掘調査が望まれる。

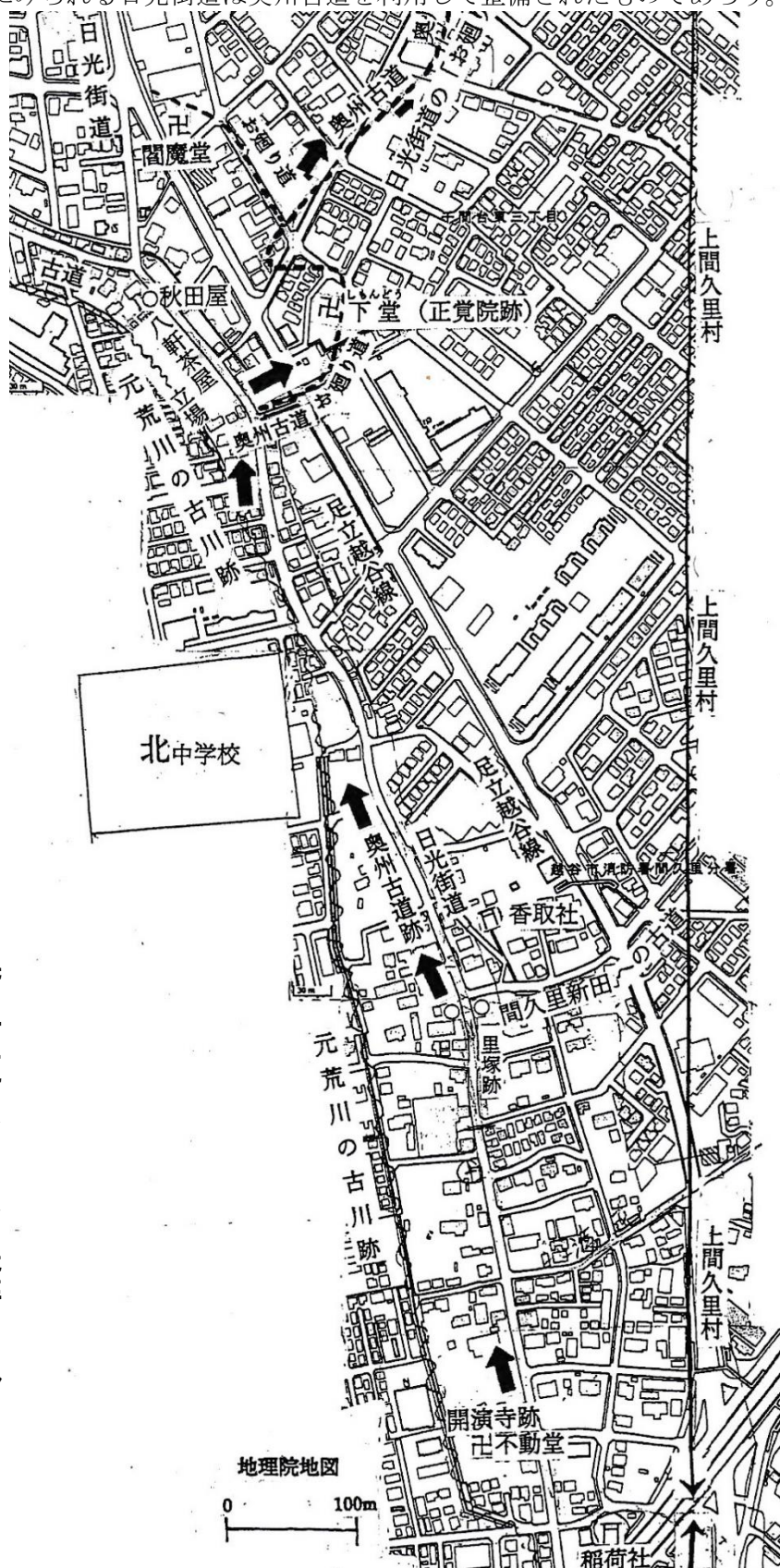
なお「海道西」の地名の「海道」は、日光街道をさし、江戸初期から見られる表記で、現在まで^{あざ}字名として残っている。

- ⑪ 「間久里」とは、現在の^{しもまくり}下間久里・^{かみまくり}上間久里を指し、間久里を通る奥州古道は、元荒川の古川沿いの自然堤防上に現在も変わらずに残り、江戸初期にできた日光街道筋と同一場所である（地図 12）。

つまり、大袋駅の東側にみられる日光街道は奥州古道を利用して整備されたものであろう。

地図 12

奥州古道を利用して整備された
日光街道（日光海道・正式名は日光道中）
※（ ）内は21頁の19～25行目を参照のこと。



間久里の先は、現在の新方川（千間堀）手前の北浦^{きたうら}の地となり、対岸も含めかなりの低地となるため、江戸時代以前は直進して大枝村を通過するとは考えにくく、湿地帯であったこの低地を避けるため、北東^{おおどまり}の大泊村方面に迂回したと考えられる。

右の地図は、江戸時代の様子がわかる明治13年測量の迅速測図である。江戸初期にできた日光街道は、間久里からまっすぐ北に伸びている。一方、迂回するルートもある。江戸時代以前は日光街道のようにまっすぐには進めずに遠回りした。これが奥州古道であると思われる（地図13）。

加藤作成の地図14は日光街道を迂回するルートを具体的に示した平成6年当時の略地図である。迂回ルートは、堂前^{どうまえ}の手前から日光街道より東に分かれ、下堂脇^{しもんだうわき}を通るといふ。それから念仏橋方面に進んだといわれる。

地図13と14の図中の秋田屋は、秋田藩が参勤交代の途中で立ち寄り鰻を食した所とされ、今も当時の「秋田廬^{しゅうでんろ}」と書かれた看板は大切に保管されている。街道沿いには多くの供揃いが居並ぶため、高崎力氏によると、一般の旅人は東側の古道を通ったという。古道は日光街道の御廻り道であり、いわば日光街道臨時の迂回路として使われたのである。

地図14に「海道上手^{かいどうかみて}」という字名を入れた。

「海道」とは日光街道の「街道」をさし、

「日光海道」と書かれた頃の名残である。

海がないのに日光海道と書くのはおかしいとして、新井白石により「日光道中^{どうちゅう}」と改められた。公文書はすべて「日光道中」と書かれ、日光道中が正式名称となった。

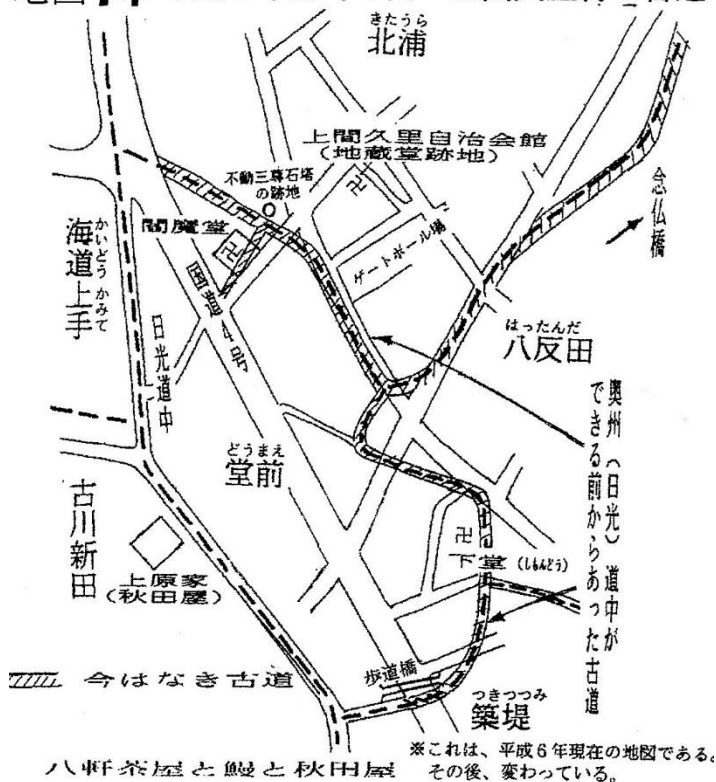
また「堂前^{どうまえ}」という字も地元にあるが、地元では「堂」とは新方川の対岸にある安国寺をさし、安国寺はかつて上間久里のこの地にあったとの言い伝えがあり、堂前はその安国寺があった名残の地名という。間久里には安国寺の檀家が多くみられるのは、そのためであろうか。安国寺の僧侶が念仏を唱えて渡ったことに由来する念仏橋は、古くから間久里の人々と安国寺とを結ぶ重要な橋であったのであろう。次の頁に念仏橋までのお廻り道を示す地図15（加藤作成）を紹介する。

日光街道の御廻り道

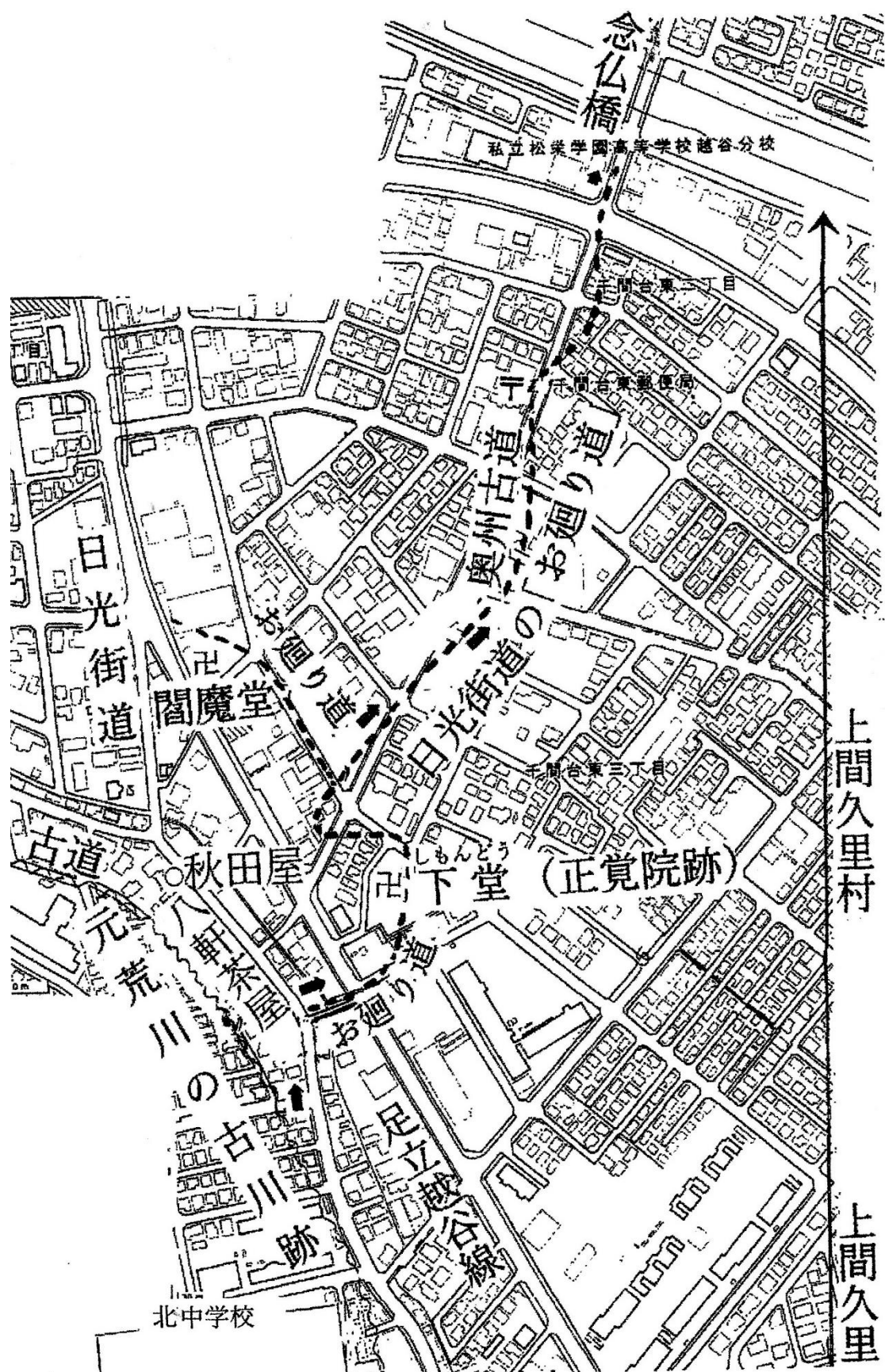
地図13 日光街道の御廻り



地図14 平成6年当時の旧・上間久里村の古道



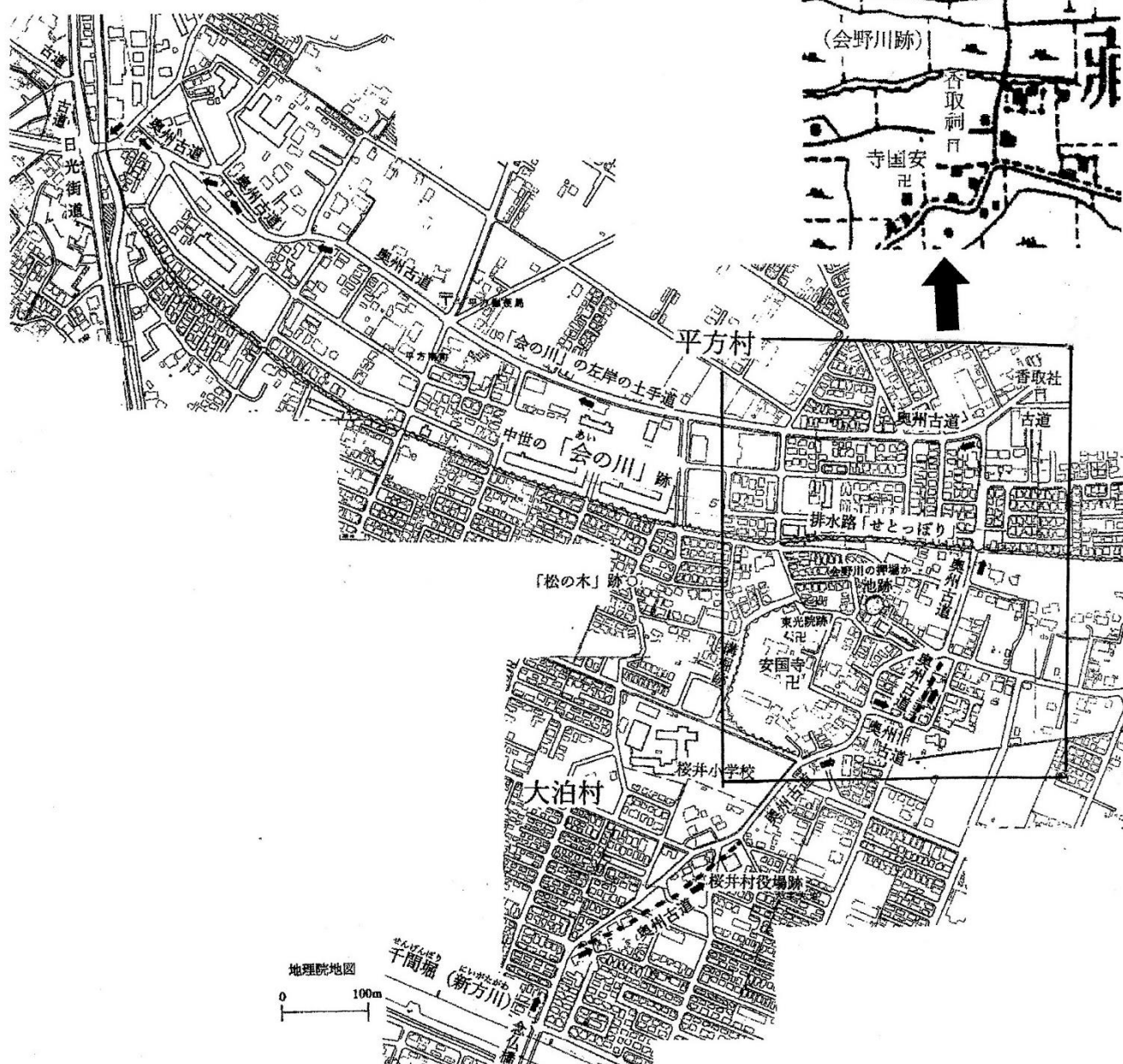
地図 15 日光街道のお廻り道、念仏橋の南部



間久里から念仏橋方面に進んで、当時は細流だった「千間堀」を渡り、道なりに行くと、安国寺の参道に突き当たる。その先は道がなく、そこで右折しさらに左に曲がって進み、現在の主要な道路に出る。そのルートは明治13年測量の迅速測図からもわかる（右下の明治13年測量の迅速測図、解説し加筆）。それから会^{あい}の川の流路跡を渡り、対岸の平方村に入る（註18）。

明治13年測量の迅速測図

地図16 日光街道のお廻り道、念仏橋の北部



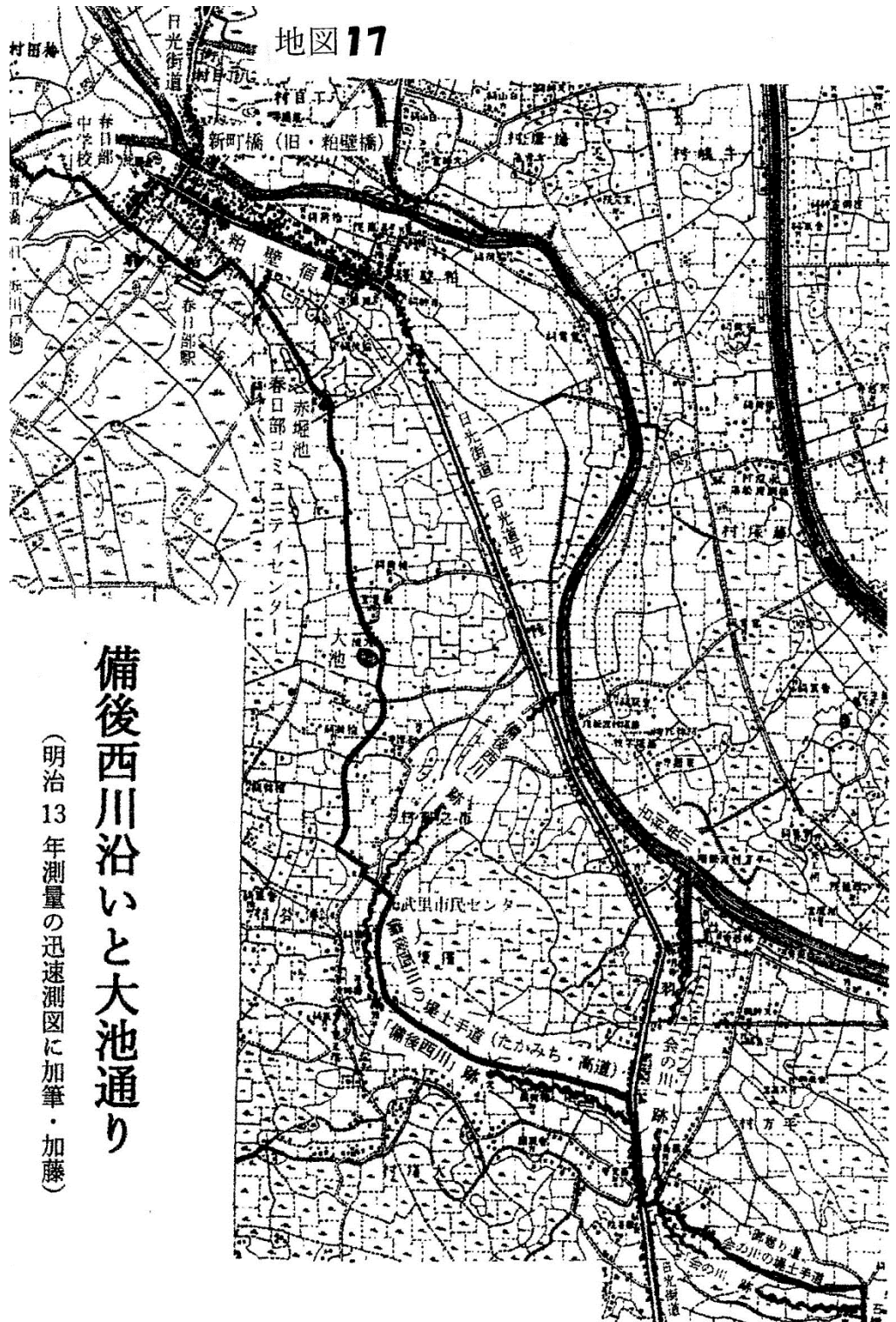
この「会の川」がかつて流れていた名残を渡って進むと、現在の「野田岩槻線」の「会の川」沿いの土手道に突き当たる。今度はこの「会の川」の左岸の土手道を西に進み、再び「会の川」（現在は会之堀川）に架かる上流の会之堀橋（註19）を渡って現在の日光街道に合流する。お廻り道によって再び日光街道に戻るのである（上の地図16）。

4. 越谷市を過ぎた先の奥州古道の考察 (⑫～⑬)

春日部市に入ってから奥州古道は、二通りのルートが考えられる。備後村の西側の村境を流れていた仮称「備後西川」(現在はこの川はない) 沿いの土手道を通るルート(これを「備後西川ルート」とする)、もう一つは、そのまま古利根川沿いに直進するルート(「古利根・会あいの川ルート」である(27頁の地図 **21** 参照)。

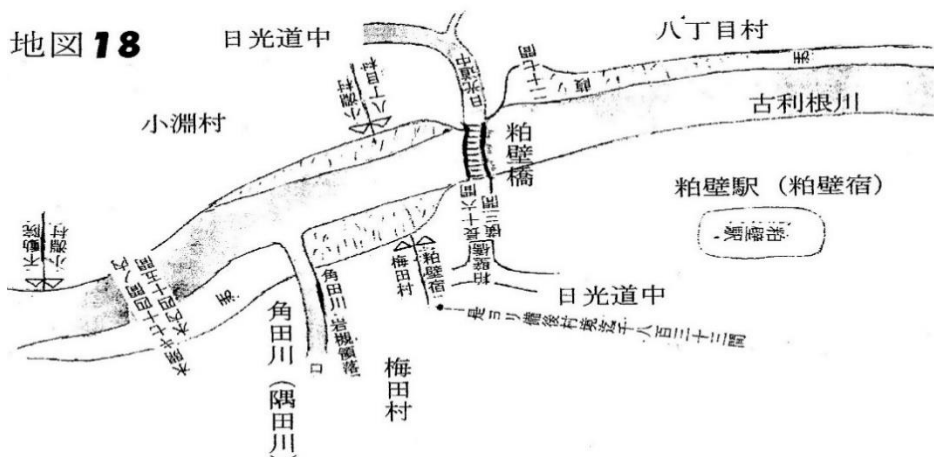
まず、備後西川ルートを説明すると、現在の藤塚橋の北から備後村の周りがかつて西に反時計回りに流れて、平方村の南側の周りがかつて流れた「会あいの川」に合流した川(現在の会之堀川の一部)があり、この川は仮称「備後西川」と名付けられている。奥州古道は、備後西川の左岸の備後村のよく発達した自然堤防上の道を進んだと推定した(地図 **17**)。

具体的にコースを紹介すると、会之堀橋(旧俗称・土橋、がまん橋)から日光街道を北に進み、備後南交差点の東側に左折した道に入る。地元では「高道(たかみち)」と呼ばれ、武里小学校の東側の道に通じる堤土手の古道で、備後の西側にかつて流れていた備後西川の左岸の土手道といえる。次は、地元では「街道」とかつて呼ばれた大池通り(大池、赤堀池)を進み、「粕壁橋」方面に向かう(地図 **17**)。



- ⑫ 粕壁橋とは「八条領村々絵図」の解説により現在の古利根川に架かる新町橋だと判明した（下図）。

※粕壁橋は、現在の
新町橋



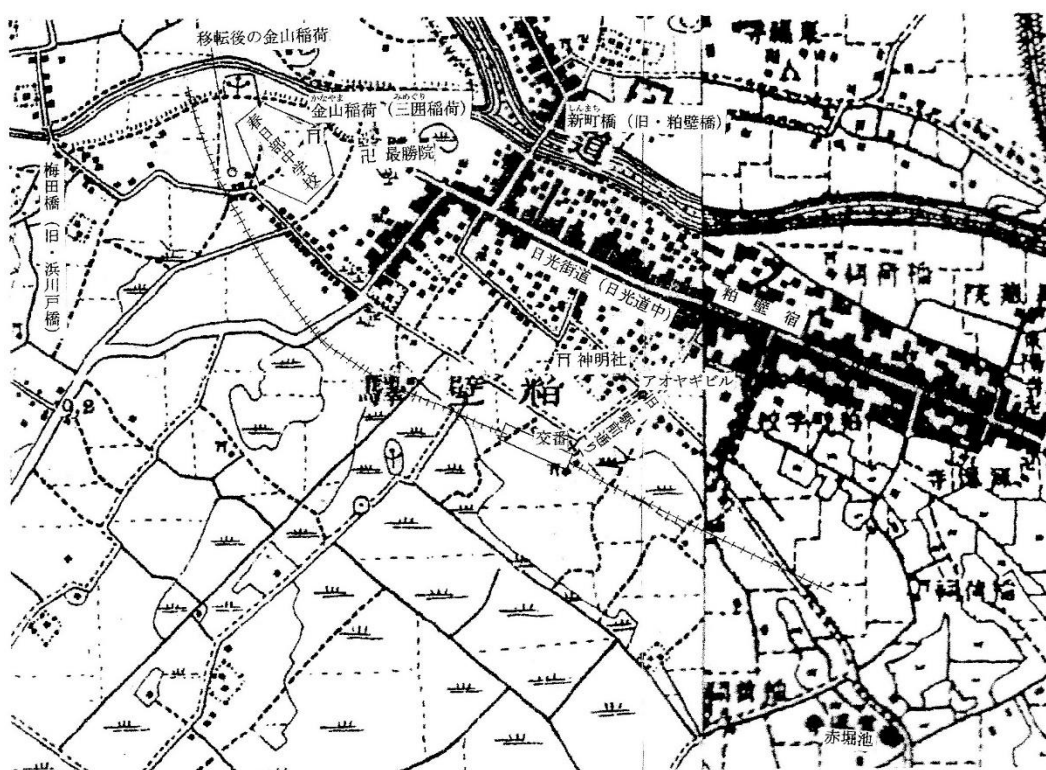
越谷市立図書館所蔵 絵図の部 資料番号
25「八条領村々絵図」(解説・作成 加藤幸二)

粕壁橋(現・新町橋)

粕壁橋が現在の新町橋と判明したことにより、奥州道のルートは以下の通りと推測できる。

大池通りを進み、備後西川の途中の武里市民センターのあたりで対岸に渡り、大池や赤堀池跡(現・春日部コミュニティセンター)沿いの古道を通り、粕壁橋(新町橋)を渡らずに新町橋の南方にある日光街道ができる前の古道(現在、玉蔵院のある通り)を通る。その後、春日部中学校(ここに他所に移転する前の金山稲荷があった)の手前を左折し踏切を渡り、古隅田川に架けられた浜川戸橋(現・梅田橋)《江戸時代の古道》へと進んだ(下の迅速測図及び次頁の「春日部八幡神社そばの古道」参照)。

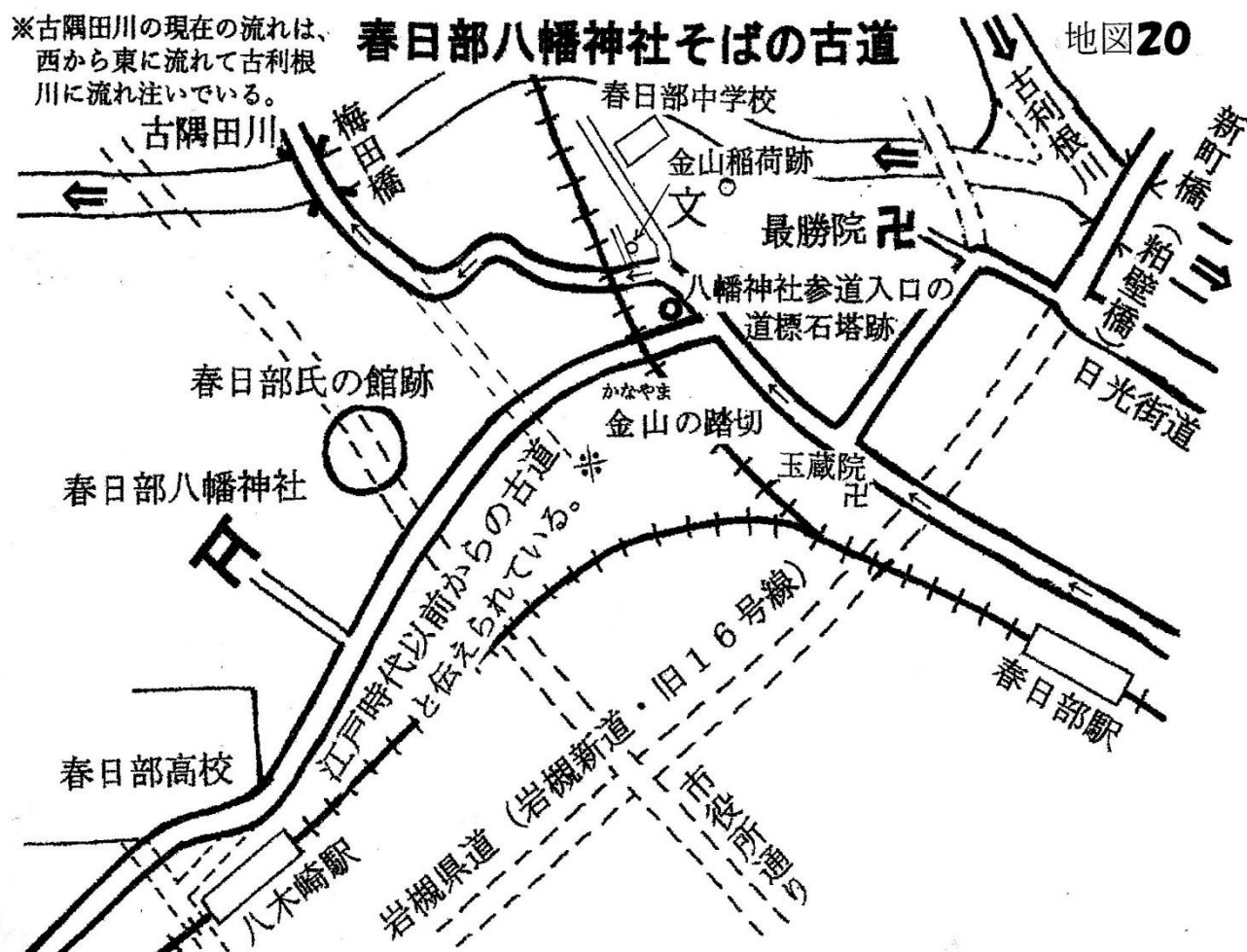
地図19 粕壁橋(現・新町橋)周辺の拡大地図



明治13年測量の迅速測図に加藤が加筆

粕壁橋を渡らずに通って西にある自然堤防と河畔砂丘が発達している浜川戸そばの古隅田川方面に進む。江戸時代に古隅田川に架けられていた現在の梅田橋(旧・浜川戸橋)を渡ったのであろう。

次は、新町橋から春日部八幡神社にかけての古道の様子地図と、その解説である。



※上記の春日部八幡神社前の古道は、現在の国道16号の新方袋交差点や^{にいがたぶくろ}埼玉葛齋場そばを^{さいかつ}通って、^{おなり}御成街道につながる道であった。

この江戸時代以前からあったといわれるこの古道は、埼玉葛齋場の手前で古隅田川を渡るが、ここが太田^{はなづみごう}荘花積郷にあるとされる御厩瀬渡（みまやせのわたし、みまやのせわたし）との説がある（註20）。下流長宮^{ながみや}方面の古隅田川の左岸（東側）自然堤防上の金山堤からやってくる古道の渡し場でもあろう。

※一方、上の地図20で、現在の春日部駅そばから梅田橋方面に続く古道が、江戸時代以前の草加市内の中川（古利根川）沿いや越谷市内の元荒川沿いからやってくる往古奥州道と推定できる。

※八幡神社参道入口の道標石塔が金山の地にあったのは、かつてこのあたりの古道が交通の要所だったからと思われる（地図20の八幡神社参道入口の道標石塔跡）。

※この近くの現在の春日部中学校の校庭内の北端にかつて金山稲荷（三囲稲荷）があって、信仰が盛んであった。現在は、大正年間に粕壁4-2-22と4-2-25の間に移転して現在に至っている。

「金山」の読み方は「かなやま」であるが、古老によると本来は「かねやま」と呼ばれたという。

奥州古道のもう一つのルートである古利根・会の川コースは、日光街道ができる前からの道と伝えられており、日光街道の東側に並行した古道である。かつての大河である会の川の自然堤防上に見られた(地図**21**)。この古道に沿って現在でも雷電社や称名寺がある。

さらに北方は、今度は古利根川の自然堤防へと続く。この先には岩槻城主高力清長が粕壁の土豪関根図書に粕壁に新宿を作るようにとの要請によってできたという「粕壁新宿」がある。その位置は元新宿(現・春日部市緑町)あたりと考えられている。寅年の慶長7年(1602)、あるいは天正18年(1590)のことであるという。この粕壁新宿を通るルートも福井猷貞画記す奥州古道とは別の奥州古道である。

また、他にも奥州古道の例があげられる。古隅田川の御厩瀬渡である。太田荘花積郷にあるとされることから、残念ながら「越ヶ谷瓜の蔓」に記載された奥州古道とは別で、元荒川左岸の大道村(越谷市大道)を抜ける中世の奥州古道の一部ではなかっただろうか。

⑬⑭「⑬百間(を)通り、⑭幸手(に)入る」とは、古隅田川を渡ってから、現・宮代町の百間を通り、当時の利根川(現、古利根川)にあった高野(現・杉戸町)の渡しを渡り、左岸の川付き堤を通過、かつての鎌倉街道であった日光御成道(鎌倉街道の中ツ道・中の道)と合流する。そこから日光街道でもある日光御成道を進み、そのまま幸手宿に至ったのではないであろうか(8頁の地図**6**)。

⑮「御成道迄川付き堤(を)通り、往還にて之れ有る由」とは、⑬⑭で述べたように、百間から日光御成道までは百間を抜けて高野の渡しを渡り、川付き堤を通り、御成道に合流してからは、かつての鎌倉街道であった御成街道筋(日光御成街道・日光街道)の往還へと進むということであろう。

「川付き堤」とは、秦野氏によると、かつての利根川本流である高野川(現・古利根川)左岸沿いの堤上の道という。また高野の渡しは下高野にある「万願寺橋」辺りと比定されている。つまり、古利根川を和戸駅そばの現在の万願寺橋から左岸の河畔砂丘が発達している高野に渡り、南側用水路沿いの古道(次頁の地図**22**、これは南北に見られる河畔砂丘の東側に沿っている。ここには古くからの寺院「永福寺」がある。)を通り、現在の御成道に合流し、この往還の御成街道を進んで幸手宿に入ったのであろう。さらに往還の日光街道を進むのである。これが奥州古道である(8頁の地図**6**)。そして幸手市外国府間にある日光街道の筑波道との追分(幸手市外国府間 626)までやってくる。この筑波道が、日光街道ができる前の奥州道であるという。その筑波道を進み、現在の権現堂川にかつてあった「栗橋の渡し」(元栗橋、現・五霞町)を渡って奥州(東北地方)方面へと進んだであろう(9頁の地図**7**)。

以上が江戸城からの越谷を通り、奥州への行程とつながる筑波道である。

地図**21**
古利根・会の川ルートの地



日光街道

(日光道中)

杉戸高野台駅

茨島一里塚

東武日光線

南側用水

奥州古道(推定)

御成街道

高野川

永福寺

砂丘

和泉川

和泉駅

万願寺橋

(「高野の渡し」?)

日光街道と筑波道との追分（幸手市^{そとごうま}外国府間）

28

5. 〈註〉の補説

p 10 〈註 1〉越谷市史四 史料二 四五頁の上段から下段

一右町之義（町とは越ヶ谷町をさす）、往古より武州埼玉郡騎西郷越ヶ谷村と唱来し事年曆不相分候へ共、建武二年之石碑も堀得、又市神神宮起立ハ嘉吉二年騎西郷越谷村と有之棟札も出候得ハ鎌倉御代之節奥州道中共いふ、

往古奥州道、千代田御城下より千住秋屋の里、大原通、八条堤通、南百角より西方、中町横町より元荒川渡り押立堤通り、大里古往還間久里粕壁橋手前より百間通り、幸手入、御成道迄川付堤通り往還にて有之由、又一筋ハ千住より舍人道・鳩谷・大門・岩付・上高野台通りも有之由、いづれ往古之義不相分候へ共御入国後も千住より八条通南百西方中町横丁へ通り来候、日光山 御遷葬之後千住より中町橋迄之道筋ニ相成申候、

p 10 〈註 2〉「を」を「通り」の直ぐ前に入れて、「「～（を）通り」と置き換えた（秦野秀明氏の案）。

さらに往還の名称なら「〇〇通り」ではなく「〇〇道」とすべきと考え、同様に「通」も「通る」の動詞と考えて「通」の前に「を」を入れて「（を）通」とした。

p 10 〈註 3〉[資料 2]の「越谷市史四 史料二」76頁の情報提供は秦野秀明氏

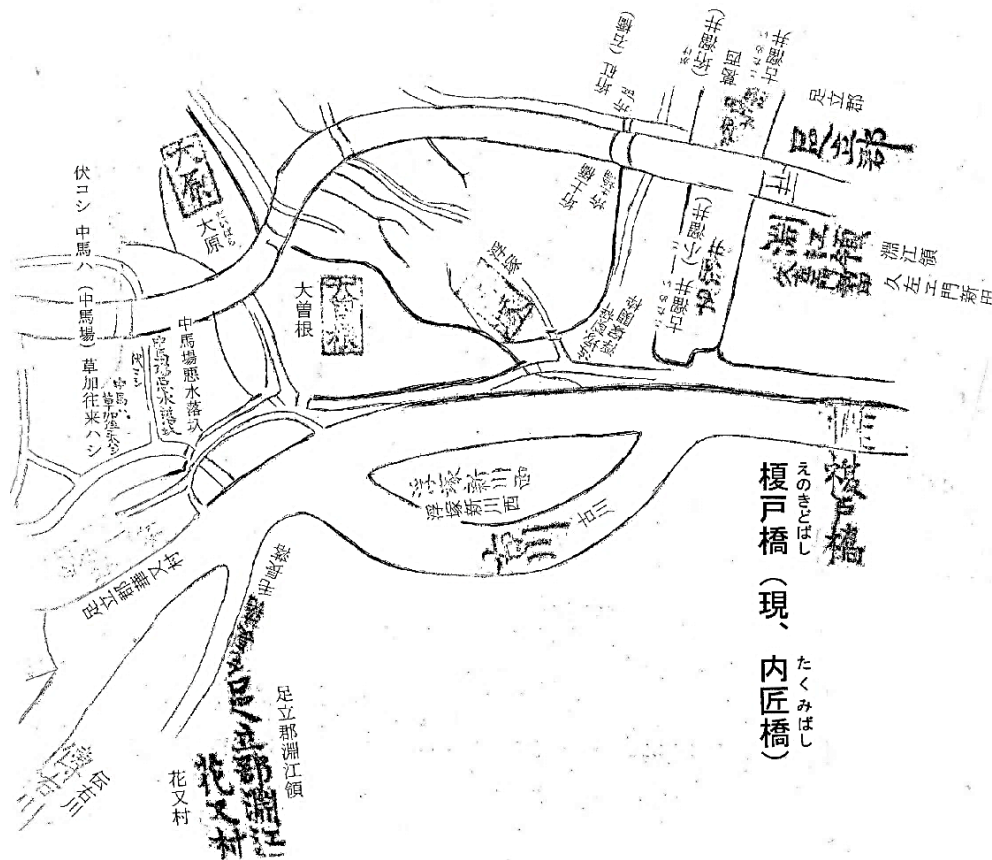
p 12 〈註 4〉奥州道（鎌倉街道支線）

「ブックレット足立風土記①千住地区」（足立区教育委員会）の72頁「足立区の交通誌マップ」の中に示された「推定鎌倉街道支線」（奥州道）を参照した。

p 12 〈註 5〉榎戸橋（現、内匠橋）

越谷市立図書館蔵・絵図の部・資料番号28「古利根川流域絵図」（解説作成・加藤）

現在、「榎戸」と呼ばれている地域は、南花畑三の二の一の塩田接骨院や花畑小学校あたりから、浮花橋の先の南花畑四の八の八までの地域を指す。古綾瀬川遊歩道より北側（埼玉側）は含まない。かつては榎戸橋の左岸も榎戸と呼ばれていた。



p 12 〈註 6〉 大原道

大原小学校のそばを通る八潮市内の南北の道。戦後になっても、道の両側に稲掛け用の^{はん}様の木の並木が見られていたという（高崎^{つとむ}力氏談）。

p 12 〈註 7〉 八条の渡しと八条堤

八条の渡しは、戦後、河岸の船着場の護岸を守るために、多くの竹が川に面して地面に直角に並べられて敷かれていた跡があるのに気付いたという（高崎^{つとむ}力氏談）。

また八条堤の下妻道(中川通り)周辺には、八条遺跡や八条輪中遺跡という古代から中世にかけての埋蔵文化財包蔵地がある。八条輪中遺跡の一つである明治に廃止された神社「八条殿社」は古墳の上に建てられていたという（「新編武蔵風土記稿」）。さらに埼玉県埋蔵文化財調査事業団が行った八条遺跡（八潮市八条八幡神社東側）での発掘調査では平安時代の住居跡や中世・近世の遺物が見つっている。

p 14 〈註 8〉 南百の地名のいわれ

高崎^{つとむ}力氏によると、戦後まで地元の古老の間で受け継がれてきた言い伝えがあるという。南百村の宝性院（現在の南百農村センター）の南西隣（東町 2-133）に広大な敷地が残っていて、遠い昔に（江戸時代初期か）ここは「お屋敷」があった所で、そこには^{くすのき}楠と^{かしわ}栢（柏）の大木がそびえ立っていたという。船頭の目印になったのであろう二つの大木の名前から木へんをとって南百村の村名が生まれたという。この敷地には、屋敷があるにふさわしく固い地面であり、さらに素焼きの破片などが散乱していたので、かつては人が住んでいた気配を感じたとのことである。

なお、南百は、現在「なんど」と呼ばれているが、それに関して高橋 操 氏は次のように紹介した。「寛永十年の『武蔵国図』記載の南百は岡山大学蔵では【なんどふ】とありますが、秋田県立公文書館蔵の『武蔵国図』では、【なんとば】とあり、漢字で『難渡場』『南渡場』と表記できそうです。」

元荒川と古利根川の合流地点に当たり、川の流れが強く渡るのに難しい所という意味であろう。

p14 〈註 9〉 大相模郷

現在の^{にしきた}西方・^{ひがしかた}東方・^{みたがた}見田方の地域は、かつて大相模郷と呼んでいた。後に西方村・東方村・見田方村の三村に分村した（「新編武蔵風土記稿」）。江戸初期には、大相模村が既に三村に分村したと思われる（正保改訂図）。右の明暦 2 年造立の「板碑型百堂巡礼塔」の「于時明暦二〇（「季」カ）大相模村」と刻まれている。確かに大相模村が三村に分村したことが裏付けられる貴重な石塔である。現在、所在が不明となっているのが残念である。

スケッチ：加藤幸一



前頁の享保15年造立の「青面金剛像庚申塔」に刻まれている「飯島村」の存在から、見田方村のうち飯島地区は、元は飯島村と称して存在し、後に見田方村に属するようになったことが判明した。

p16 〈註10〉 六本木

このあたりの土手道は、かつては「六本木」と呼ばれた場所で、江戸時代の仕置き場（処刑場）があった所という。処刑した時の刀は、河川敷に降りて元荒川の水で洗ったのであろう。またここには高札場もあったに違いない。

p17 〈註11〉 観音横町

土手道の観音横町入口の角（越ヶ谷5・3・56）までが江戸時代は現在の観音堂の境内地であった。

この角に東向きに道しるべがあった（右図・加藤作成）。この道しるべの西の方面は日光街道を横断して赤山道に進む。また南の方面は大相模の不動尊や遠くは成田山に、北方面は野田や宝珠花に通じる。現在この道標は越谷市中町の箕輪家で保管されている。



p17 〈註12〉 越ヶ谷の市神神社

「越ヶ谷瓜の蔓」に『二七市日ハ本町・中町ハ一並日也、元本道なれ共日光道筋ニ相成申候儘横町と唱、』〈越谷市史四 史料二 四から四七頁〉と記載されている。つまり、市神神明社の「二七の市の日」は本町と中町とも一致した日である。〔南百からの古道が観音横町に続く道筋は〕古くからの元の〔奥州道の〕本道であるが、日光街道筋になってからもそのまま横町と呼ばれている。というような意味であることから、「中町横丁」は現在の観音横丁を指すのである。

越ヶ谷宿の二七の六斎市は、「新編武蔵風土記稿」によると、江戸時代以前（文禄年間、1592～95）、つまり越ヶ谷宿が成立する以前から行なわれていたという。現在の大沢橋南詰めの御殿町（会田出羽家屋敷地、後の江戸幕府の御茶屋御殿）よりも市神を祀る神明社があり、元荒川の水運を利用して市が栄えたのであろう。江戸時代以前の越ヶ谷郷の六斎市から続いてきたといえよう。

なお越ヶ谷郷とは、現在の越ヶ谷町（越ヶ谷郷から名づけられた）及びその広大な周辺を越ヶ谷郷と呼んでいた。岩槻領鉤上村の江戸時代初期、慶長年間の検地帳に「武州騎西郡越ヶ谷の内、鉤上」との記載が見られることから、越ヶ谷郷は現在の岩槻区鉤上あたりまで含まれ、小田原北条氏が永禄5年（1562）に葛西領の金町の本田氏にあてた書状には「越ヶ谷・舎人」は大郷と記載されていることから、広大な地域であったということがわかる。

越ヶ谷郷については市史四史料二の四五頁下段「一越ヶ谷之義、・・・」を参照されたい。これによると、東は登戸まで含まれていたが、後に瓦曽根・登戸は越ヶ谷領から八条領に含まれることになる。

p17 〈註13〉 北越谷河畔砂丘については、埼玉県県政情報資料室発行「中川水系」によると浄光寺を載せている南北に続く河畔砂丘を「北越谷河畔砂丘Ⅰ」と名付けられている

p 18 〈註 14〉 北越谷第五公園グランドと元荒川の「入り江」跡

かつての大房の薬師堂は、「大^{おおえ（おえ）}江^{（おえ）}りの薬師」とか「押^{おえ（おえ）}江^{（おえ）}りの薬師」「尾^お入^いりの薬師」とも書き、「押江り」とは「押し入り江」がなまったものであろうか。・

大房の薬師堂の近くにある北越谷第五公園グランドは、かつて元荒川の入江であったと思われる。

p 18 〈註 15〉 大房の薬師堂（鵜の森の薬師）

「大江り（押江り）の薬師」、「大江入りの薬師」「尾入りの薬師」の他に「鵜の森の薬師」と地元で呼ばれてきた大房の薬師堂が昭和の頃まであったようである。現在は宝性寺越谷別院が建っている。

高崎^{つとむ}力氏によると、堂内には、近郷の村々からやってきた人々による俳句が書かれた額が飾ってあったので、遠くの村々から人々が集まり、俳句の会が盛んに催されていたようであるという。

そしてここには、高崎力氏の測定によると共に樹齢が五百年のケヤキ（本堂向かって左）とイチヨウ（本堂向かって右）の大木がそびえていたという。それが船頭の目印になっていたのであろう。

元荒川は、江戸湾の満ち潮がこの地まで遡上してきたと思われる（現在は瓦曽根の水門で満ち潮が止まっている）。そのため、江戸時代は、薬師堂の周辺の森の木々には鵜が多く止まっていたと思われ、「鵜の森の薬師」とも呼ばれた理由が納得できる。そして入り江では、元荒川を利用している船のための停泊地として利用されていたと思われる。現在の北越谷第五公園グランドの地である。



かつての大房の薬師堂（左は大銀杏、正面の小堂は五智如来堂、その裏は押立堤、右は本堂）

※「越谷ふるさと散歩(上)」129 と 130 頁の写真より加藤が一部合成)

p 18 〈註 16〉 秦野 秀明（2011）「往古奥州道と押立堤」『古志賀谷』越谷市郷土研究会報第十六号 27～38 頁

p 19 〈註 17〉 大里の古往還

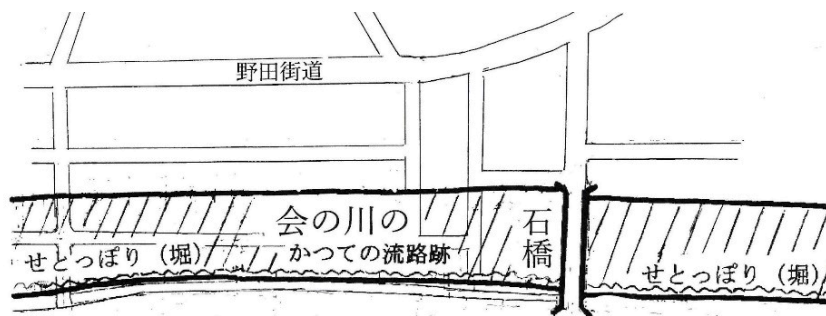
地元の調査によると、大林の香取神社の西側あたりから古川までの一帯の河畔砂丘上には、赤松も見られる「大林の^{ももやま}桃山」が一面に広がっていたという。日光街道と並行に見られた奥州古道は、大房薬師堂跡の裏側（西側）、大林寺の東側、大林の香取社周辺を北上し、大里の古往還へと続いていた。

大里の古往還は、^{ふくろやま}袋山の周囲を迂回して流れていた古川沿いの自然堤防沿いの道で、現在の大里840番地から大里715番地にかけての現在の道筋に相当するあたりにあったのであろうか。そして、その先の^{しもまくり}下間久里や^{かみ}上間久里の日光街道へと続いたと推定できる。

高崎^{つとむ}力氏によると、古川の東岸（左岸）は、河畔砂丘が広がり、古川（大林と袋山との境）から亀が大林側の砂丘に上がってきて、古川左岸あたりは亀の生息地になっていた。子供たちがそれを捕まえて業者に売ったり、越ヶ谷の久伊豆神社の池に放したりしたという。久伊豆神社に今でも住む亀はこの古川で捕獲された亀といわれる。

p 23 〈註 18〉 ^{あい}「会の川」の流路跡

平方村と大泊村との村境には、かつて会野川が東西に流れていた所であり、高崎氏によると、長い石橋がその川に架かっていて、戦前まで見られていたという。今でも屋号が「石橋」と呼ばれる家が大泊側にある。

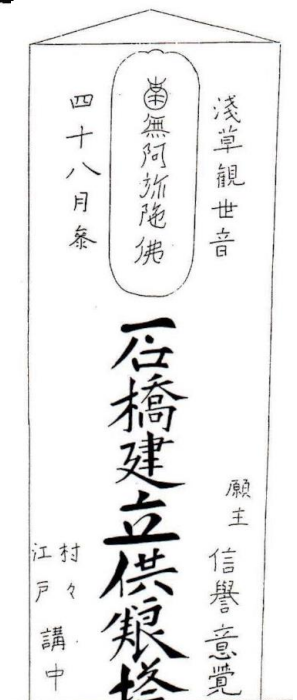


p 23 〈註 19〉 土橋そばの江戸時代の石塔「石橋建立供養塔」

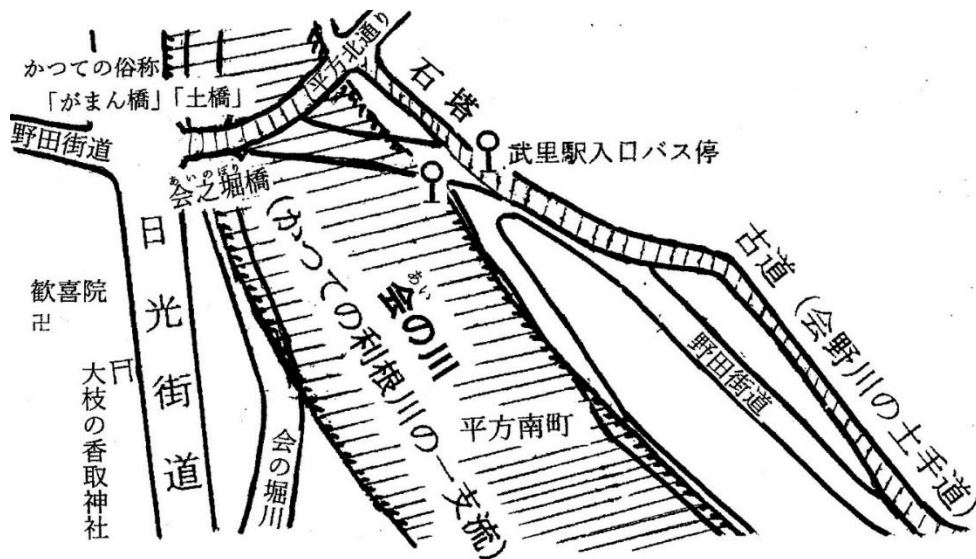
右の石塔は、^{あいのぼり}会之堀橋の平方側近くにある石橋供養塔である。日光街道（日光道中）から平方に入る地点に橋が架けられていた。ここに新たに石橋が建立されたことを記念し、供養の意味も込めてこれを建てたのである。

この石塔に刻まれた銘文によると、造立した一人である「願主・信譽意覚」は、「浅草観音」「四十八月参」と刻まれていることから、浅草観音に毎月参拝し、それを三年間も続けていたことがわかる。この石塔は、「江戸」や近在の「村々」で作った「講中」の人々によって建てられたものである。江戸との人的交流がうかがえる。

この供養塔には言い伝えが残っている。江戸時代のこと、この川に架かっていた橋がもろいため荷馬車が馬もろとも川に落ちてしまった。馬は死んでしまった。そこでその馬を連れて来た江戸浅草の人が土橋を頑丈な石橋に直した。その石橋建立供養として、この石塔が建てられたという。



石塔「石橋建立供養塔」とその周辺の地図



上の地図で、現在の会之堀橋は、地元では「土橋」とか「我慢橋」と呼んでいた。

戦前のことであるが、武里駅入口交差点の西側の道路南角には、すぐそばの会之堀に架かる土橋からとった「土橋」と呼ばれた屋号の金子氏が、道路北角には「我慢」と呼ばれた正籠氏が住んでいた。正籠氏は職業が人力車、客から運賃を負けるようにせがまれると、つつい我慢して客のいいなりになってしまうことから「我慢」という屋号がついたという。それ以降、土橋のことを「我慢橋」とも呼ばれるようになったという。

p 26 〈註 20〉 御厩瀬渡については遠藤忠氏著の小論文「旧利根川の御厩領関について」の中で次のように触れられている。

古隅田川の右岸（北岸）にあった「御厩領関」の「領」は、「料」（料所つまり関銭を取る料金所）のことで、陸上関（渡し）より水運としての水路関（河関）としてとらえて論じ、旧利根川の河関を紹介し、御厩瀬渡は「みまやせのわたし」ではなく「みまやのせわたし」と読むべきだ（要約）。

p 2 〈註 21〉 西方村(不動尊)から登戸村・蒲生村までの古道(街道筋往来道)

江戸時代は、西方村の不動尊(大聖寺)に通じる「不動道」と呼ばれた。

そのルートは右の通りである。

